

西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書（15）

KDDI無線通信基地局（西之表市安城基地局）建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

鋤ノ刃遺跡

2006年2月

鹿児島県西之表市教育委員会

序 文

種子島は、黒潮海流の中に位置し、低平な大地と数多くの小川があり、照葉樹林が繁茂し、古くから自然の恵みを受け豊かな環境のもとにあることから、島の各所から遺跡が数多く発見されています。

この鍬ノ刃遺跡は、KDD I 安城無線通信基地局建設工事に伴うもので、西之表市教育委員会が主体となり、発掘調査を実施したものであります。

本遺跡からは、縄文時代早期の土器の他にも、石鏃、磨製石斧などの石器類、集石等の遺構も検出されており、近くにも同時期の遺跡があることから、この場所が縄文人にとって生活に適した環境であったことがわかります。

本報告書が、埋蔵文化財の保護に対する認識を深め、学術研究の一助になれば幸いです。

最後に、本報告書を刊行するにあたり、ご協力いただきました鹿児島県教育庁文化財課及び同県立埋蔵文化財センターをはじめ、KDD I 福岡エンジニアリングセンター、さらに貴重なご助言をいただきました諸先生方に対して厚くお礼申し上げます。

平成18年2月

西之表市教育委員会教育長 有島正之

報 告 書 抄 録

ふりがな	くわのは いせき							
書名	鍬ノ刃遺跡							
副書名	KDD I 西之表市安城無線通信基地局建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	15							
編集者名	沖田純一郎							
編集機関	西之表市教育委員会							
所在地	〒891 - 3193 鹿児島県西之表市西之表7612番地							
発行年月日	2006年2月28日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
鍬ノ刃遺跡	鹿児島県	462136	120	30°	131°	試掘確認	20m ²	無線通信 基地局建 設工事
	西之表市			37′	02′	20050208		
	安城大野			46″	58″	～		
	鍬ノ刃					20050221		
							緊急調査	
						20050405	109m ²	
						～		
						20050428		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
鍬ノ刃遺跡	散布地	縄文時代早期	集石 配石	土器 (吉田式等) 石鏃 磨製石斧 磨石 敲石 台石類ほか				

例 言

1. 本書はKDD I 西之表市安城無線通信基地局建設工事に伴う鍬ノ刃遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本調査は、KDD I 福岡エンジニアリングセンターの委託を受け、西之表市教育委員会が実施した。
3. 本書に用いたレベル数値は、KDD I 福岡エンジニアリングセンターが作成した地形図に基づく海拔高である。
4. 本書の遺物番号は全て通し番号で本文及び挿図・図版番号と一致する。
5. 発掘調査における測量・実測・写真撮影は沖田が行い、中村桂子・荒井美佳子・村松真由子・桑原とも子が測量・実測の補助を行った。
6. 本書の執筆と編集は沖田が行い、遺物の実測・トレース、図面整理は沖田、荒井美佳子・中村桂子・内田順子・末満直美・原里菜が行った。
7. 写真図版の遺物撮影は種子島開発総合センター委託職員尾形之善氏と沖田が行った。
8. 出土遺物の科学分析はパリノ・サーヴェイ（株）が行った。
9. 整理作業に関して、鹿児島県教育庁文化財課・鹿児島県立埋蔵文化財センターの指導・協力を得た。
10. 出土遺物は西之表市教育委員会で保管し、展示・活用する。

目次

序文
報告書抄録
例言

第I章 調査の経過	2	第3節 遺構	9
第1節 調査に至る経緯	2	第4節 遺物	14
第2節 調査の組織	2	(1) 土器	14
第3節 調査の経過	3	(2) 石器類	37
第II章 遺跡の位置と環境	6	第IV章 科学分析	58
第1節 遺跡の位置	6	第V章 調査のまとめ	60
第2節 遺跡の環境	6	第1節 遺構	60
第III章 発掘調査の概要	9	第2節 遺物	60
第1節 調査の概要	9	第3節 総括	61
第2節 層位	9		

挿図目次

第1図 鍬ノ刃遺跡の位置	1	第18図 出土遺物(4)	26
第2図 確認調査トレンチ配置図	5	第19図 出土遺物(5)	27
第3図 鍬ノ刃遺跡と周辺遺跡図	7	第20図 出土遺物(6)	28
第4図 発掘調査地	10	第21図 出土遺物(7)	29
第5図 土層断面図	11	第22図 土器出土状況(胴部)	30
第6図 遺構配置図	12	第23図 出土遺物(8)	31
第7図 遺構	13	第24図 出土遺物(9)	32
第8図 全遺物出土状況	15	第25図 土器出土状況(胴部)	33
第9図 全土器出土状況	16	第26図 出土遺物(10)	34
第10図 土器集中出土状況Ⅰ	17	第27図 出土遺物(11)	35
第11図 土器集中出土状況Ⅱ	18	第28図 出土遺物(12)	36
第12図 土器集中出土状況Ⅲ	19	第29図 土器出土状況(底部)	38
第13図 土器出土状況(Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類)	21	第30図 出土遺物(13)	39
第14図 出土遺物(1)	22	第31図 出土遺物(14)	40
第15図 出土遺物(2)	23	第32図 土器出土状況(底部)	41
第16図 土器出土状況(Ⅳ類)	24	第33図 出土遺物(15)	42
第17図 出土遺物(3)	25	第34図 土器出土状況(底部・土製品)	43

第35図	出土遺物 (16).....	44	第39図	出土遺物 (19).....	48
第36図	出土遺物 (17).....	45	第40図	出土遺物 (20).....	49
第37図	全石器類出土状況	46	第41図	出土遺物 (21).....	50
第38図	出土遺物 (18).....	47			

表目次

第1表	鍬ノ刃遺跡周辺遺跡地名表	8	第5表	土器観察表 (4)	54
第2表	土器観察表 (1)	51	第6表	土器観察表 (5)	55
第3表	土器観察表 (2)	52	第7表	土器観察表 (6)	56
第4表	土器観察表 (3)	53	第8表	石器観察表	57

写真図版

図版1	調査状況 (1)	62	図版12	出土遺物 (4)	73
図版2	調査状況 (2)	63	図版13	出土遺物 (5)	74
図版3	配石・集石・土器集中出土状況 (1)	64	図版14	出土遺物 (6)	75
図版4	土器集中出土状況 (2)~(5).....	65	図版15	出土遺物 (7)	76
図版5	遺物出土状況 (1)	66	図版16	出土遺物 (8)	77
図版6	遺物出土状況 (2)	67	図版17	出土遺物 (9)	78
図版7	遺物出土状況 (3)	68	図版18	出土遺物 (10)	79
図版8	遺物出土状況 (4)	69	図版19	出土遺物 (11)	80
図版9	出土遺物 (1)	70	図版20	出土遺物 (12)	81
図版10	出土遺物 (2)	71	図版21	出土遺物 (13)	82
図版11	出土遺物 (3)	72			



第1図 鍬ノ刃遺跡の位置

第 I 章 調査の経過

第 1 節 調査に至る経緯

KDD I 福岡エンジニアリングセンターは西之表市安城地内において、安城無線通信基地局建設を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について平成 16 年 12 月に西之表市教育委員会に照会した。

これをうけて、西之表市教育委員会が平成 17 年 1 月に埋蔵文化財分布調査を実施した。その結果、工事予定地は周知の遺跡ではないものの、建設工事周辺の畑地で遺物を採取したため、試掘・確認調査が必要と回答した。

分布調査の結果から、KDD I 福岡エンジニアリングセンターは建設工事対象地の試掘・確認調査を西之表市教育委員会に依頼した。試掘・確認調査は西之表市教育委員会が調査主体となり、遺跡の有無・時代・遺物が出土する深さ等を把握するため平成 17 年 2 月 8 日から 2 月 21 日まで行った。

調査の結果、工事対象地内に縄文時代早期の遺物包含層が残存していることが確認された。調査結果をもとに、KDD I 福岡エンジニアリングセンター・西之表市教育委員会で遺跡の取り扱いについて協議を行い、工事の計画上遺跡の現状保存は困難であるため工事着工前に、対象地の埋蔵文化財緊急発掘調査（全面調査）を実施することとなった。

緊急発掘調査は西之表市教育委員会が調査主体となり、平成 17 年 4 月に実施した。整理・報告書作成作業は平成 17 年度に行った。

第 2 節 調査の組織

(試掘・確認調査)

事業主体者	KDD I 福岡エンジニアリングセンター		
発掘調査主体者	西之表市教育委員会		
発掘調査責任者	西之表市教育委員会	教育長	有島 正之
発掘調査企画担当	西之表市教育委員会	社会教育課 課長	阿世知猛雄
〃	〃	〃 課長補佐	奥村 学
発掘調査担当	西之表市教育委員会	社会教育課 主事	沖田純一郎
発掘調査作業員	中村桂子・小倉千里・高石香織・荒井美佳子・田畑奈枝沙 種子田ゆかり・村松真由子		

(緊急発掘調査)

事業主体者	KDD I 福岡エンジニアリングセンター		
発掘調査主体者	西之表市教育委員会		
発掘調査責任者	西之表市教育委員会	教育長	有島 正之
発掘調査企画担当	西之表市教育委員会	社会教育課 課長	河野 博康
発掘調査企画担当	〃	〃 課長補佐	奥村 学
発掘調査担当	西之表市教育委員会	社会教育課 主事	沖田純一郎
発掘調査作業員	中村桂子・桑原とも子・村松真由子・荒井美佳子		

(整理・報告書作成)

事業主体者	KDD I 福岡エンジニアリングセンター		
作成主体者	西之表市教育委員会		
作成責任者	西之表市教育委員会	教育長	有島 正之
作成企画担当	西之表市教育委員会	社会教育課 課長	河野 博康
”	”	” 課長補佐	奥村 学
作成庶務担当	西之表市教育委員会	社会教育課 主査	濱渡 友子
作成担当	西之表市教育委員会	社会教育課 主事	沖田純一郎
整理作業員	内田順子・中村桂子・末満直美・原 里菜・荒井美佳子		

第3節 調査の経過

(試掘・確認調査)

試掘・確認調査は平成17年2月8日から2月21日にかけて行った。工事対象地内に任意に2m×4mのトレンチを2本、2m×2mのトレンチを1本、合計3本のトレンチを設置し、人力により掘り下げながら調査を実施した。2・3トレンチから貝殻文系の土器片が出土し配石と思われる遺構もそれぞれ検出された。特に3トレンチからは100点を超える土器片が出土した。1トレンチからは遺物の出土はなかったものの土層の堆積は良好であり、2・3トレンチの遺物の出土状況から周囲に遺物・遺構が存在する可能性が大いに考えられた。よって、掘削を行う工事対象地のほとんどの遺物包含層が残存するという結論に至った。調査面積は20㎡であった。工事対象地周辺は周知の遺跡として登録されていなかったため、遺跡の発見届を鹿児島県教育委員会へ提出し、字名から鍬ノ刃遺跡となった。

(緊急発掘調査)

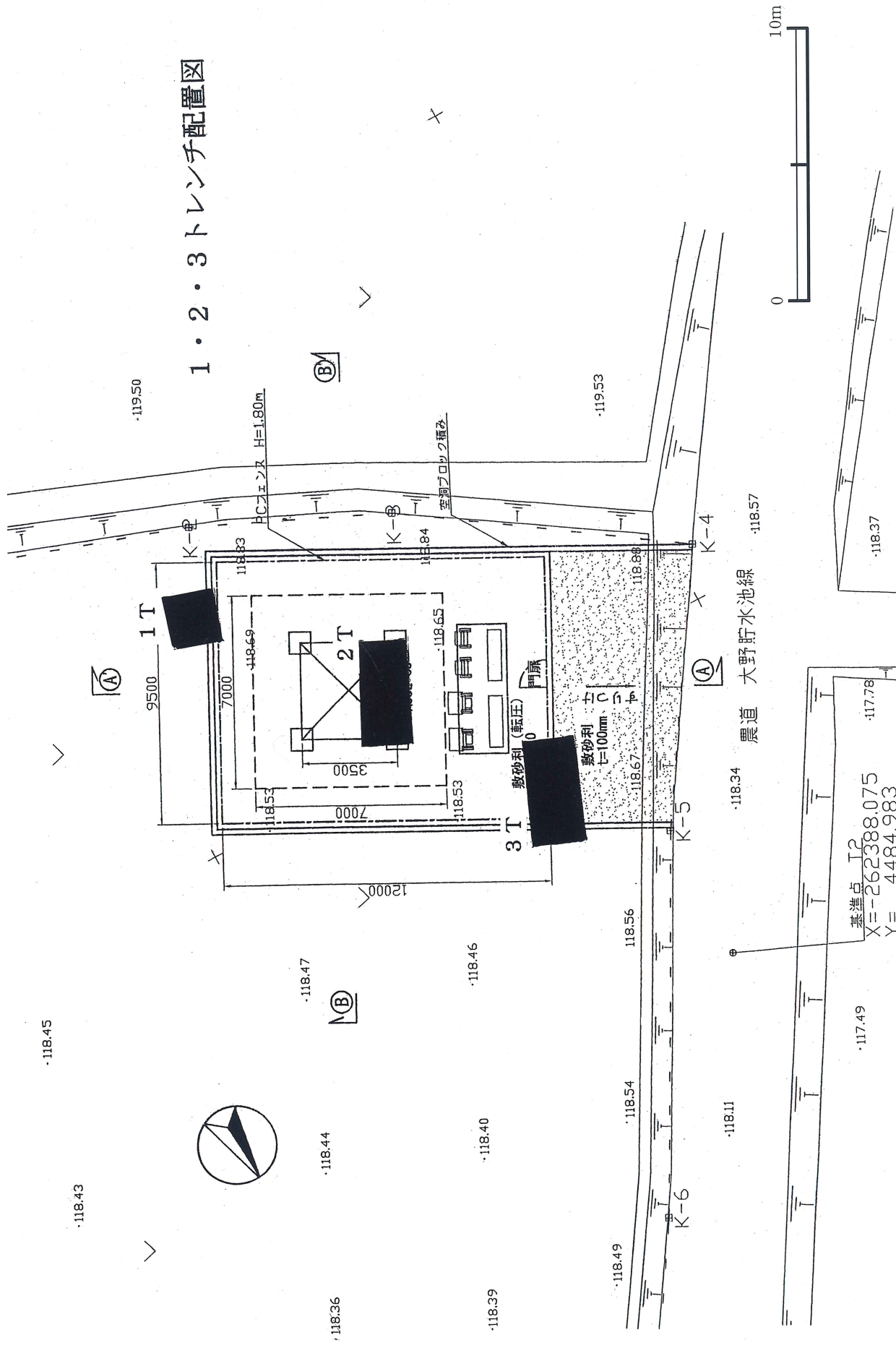
緊急発掘調査は平成17年4月5日から28日まで行った。工事で掘削を行う部分のみを調査対象地とし、工事の設計に準じて、1・2・3区とトレンチを設置した形での調査となった。確認調査の結果から遺物はアカホヤ火山灰層より下位から出土することが明らかであったため、各調査区の表土からアカホヤ火山灰層中位までを重機で除去後、人力で掘り下げながら遺物・遺構の検出を行った。調査面積は109㎡である。

以下調査の経過については日誌抄をもってかえる。

(緊急発掘調査)

4月5日	火	調査地重機により表土剥ぎ。調査地杭打ち作業。調査地設定, 1・2・3区とする。
6日	水	1区掘り下げ, 遺構検出作業。2・3区掘り下げ。
7日	木	1・2区掘り下げ。土器片多量に出土する。
8日	金	2区掘り下げ。土器片出土。河野社会教育課長・奥村補佐来跡。
11日	月	1区掘り下げ。配石検出作業。土器片出土。土器出土状況実測作業。平板・レベル遺物取り上げ。西之表市教育委員三浦安德氏来跡。
12日	火	2・3区掘り下げ。土器片出土する。土層断面清掃。
13日	水	2・3区掘り下げ。平板・レベル遺物取り上げ。市文化財保護審議委員鮫嶋安豊氏・種子島開発総合センター尾形之善氏来跡。
14日	木	2区, 平板・レベル遺物取り上げ。土器出土状況実測作業。東側土層断面図実測作業。
15日	金	2区, 土器出土状況実測作業。3区, 掘り下げ。平板・レベル遺物取り上げ。
18日	月	3区, 掘り下げ。土器片・石鏟出土。
19日	火	3区, 掘り下げ。土器出土状況実測作業。平板・レベル遺物取り上げ。
21日	木	1区, 掘り下げ。土器片出土。土層断面図実測作業。奥村社会教育課長補佐来跡。
22日	金	1区掘り下げ。平板・レベル遺物取り上げ。
25日	月	1区掘り下げ。土層断面図実測作業。
26日	火	1・3区掘り下げ。土層断面図実測作業。河野社会教育課長・奥村補佐来跡。
27日	水	1・3区掘り下げ。平板・レベル遺物取り上げ。
28日	木	3区掘り下げ。調査地清掃, 写真撮影。道具後片付け。調査終了。

1・2・3トレンチ配置図



第2図 確認調査トレンチ配置図

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置

種子島は本土最南端の佐多岬から大隅海峡を隔てた、東南約40kmの海上にあり、南北52km、東西12kmの北北東から南南西に細長く伸びた、最高標高でも282.3mしかない低平な細長い島で、地形は丘陵性の山地、海岸段丘、河川付近の沖積低地からなり、西方に位置する屋久島とは対照的である。また、西海岸部には比較的砂丘が発達しているが、東海岸は断崖に富んでいる。行政区は北から西之表市・中種子町・南種子町と1市2町からなる。

鍬ノ刃遺跡は西之表市の東南海岸部安城地区大野の標高約120mの海岸段丘上に位置し、遺跡の東側には太平洋を望むことができる。周辺ではほぼ最も高い位置に遺跡は形成されている。

種子島の遺跡について述べると、約3万年前の旧石器時代の遺跡である横峯遺跡（南種子町）・立切遺跡（中種子町）や、細石核・細石刃が採集された湊遺跡・大中峯遺跡（西之表市）があり、奥ノ仁田遺跡（西之表市）の調査によって縄文時代草創期の遺跡が初めて確認され、その後鬼ヶ野遺跡や三角山遺跡（中種子町）の調査で縄文時代草創期の住居址や多数の遺構、遺物が発見され注目を浴びている。その後の縄文時代早期・前期の遺跡も島内各地で確認されているが、中期の遺物の報告例は少ない。後期の遺跡は指宿式・市来式などが出土する遺跡が島内各地で確認されており、納曾式土器の標識遺跡である納曾遺跡（西之表市）、特異な配石遺構が多数検出された藤平小田遺跡（南種子町）などがある。

弥生時代は下剥峯遺跡・田ノ脇遺跡・馬毛島椎ノ木遺跡（西之表市）や、多数の人骨と貝製品が出土した広田遺跡（南種子町）、覆石墓・人骨が出土した鳥ノ峯遺跡（中種子町）などがあり、中期頃の土器片が出土する遺跡も確認されているが、埋葬址が多いのが特徴的である。

古墳時代に属すると思われる遺跡は上能野貝塚（西之表市）などがある。種子島において、弥生時代以降の遺跡は極端に少ないため、未解明な点が多いのが現状である。

第2節 遺跡の環境

鍬ノ刃遺跡が所在する西之表市の東南海岸側、とくに安城・立山地区は近年開発事業のため発掘調査が毎年実施され、良好な資料が出土している。特に、奥ノ仁田遺跡・鬼ヶ野遺跡は縄文時代草創期(約12,000年前)の遺跡であり、奥ノ仁田遺跡の出土品は県の文化財に指定された。平成13年に調査が行われた鬼ヶ野遺跡からは竪穴住居跡や多数の遺構が検出され、400点以上の石鏃が出土し話題となった。今後も縄文時代草創期の遺跡は増加していくものと思われ、縄文時代の成り立ちを考える上で、重要な場所である。



1 / 25000

第3図 鋤ノ刃遺跡と周辺遺跡図

第1表 鍬ノ刃遺跡周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	備考
1	仮屋園	西之表市安城平山	縄文時代早期	平成10年農政分布調査
2	通利山	西之表市安城上之町	縄文時代	平成13年県道分布調査 平成15年試掘調査
3	鬼ヶ野 A	西之表市安城上之町	縄文時代	平成12年確認調査
4	鬼ヶ野 B	西之表市安城上之町	縄文時代	平成12年確認調査
5	鬼ヶ野	西之表市安城上之町	縄文時代草創期	平成13年発掘調査
6	日守 C	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成6年確認調査
7	三本松	西之表市安城川脇	縄文時代早期	平成17年発掘調査
8	日守 B	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成6年確認調査
9	日守	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成7・8年発掘調査
10	長迫	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成13年試掘調査
11	東前平	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成14・15年発掘調査
12	芦野	西之表市立山芦野	縄文時代早期	平成16年発掘調査
13	九郎三エ門	西之表市立山芦野	縄文時代	平成3年農政分布調査
14	奥嵐	西之表市立山植松	縄文時代早期	平成5年発掘調査
15	奥ノ仁田	西之表市立山植松	縄文時代草創期 ・早期	平成5年発掘調査 出土品は県文化財に指定
16	尾呂ノ平	西之表市立山御牧	縄文時代	平成13年県道分布調査
17	長崎	西之表市立山	縄文時代	平成13年県道分布調査
18	中園 A	西之表市立山	縄文時代	平成13年県道分布調査
19	中園 B	西之表市立山	縄文時代	平成13年県道分布調査
20	下ノ平	西之表市立山	縄文時代	平成13年県道分布調査
21	鍬ノ刃	西之表市安城大野	縄文時代早期	平成17年発掘調査 本報告書

第三章 発掘調査の概要

第1節 調査の概要

緊急発掘調査は平成17年4月5日から28日まで行った。工事で掘削を行う部分のみを調査対象地とし、工事の設計に準じて、1・2・3区とトレンチを設置した形での調査となった。確認調査の結果から遺物はアカホヤ火山灰層より下位から出土することが明らかであったため、各調査区の表土からアカホヤ火山灰層中位までを重機で除去後、人力で掘り下げながら調査を進めた。試掘・確認調査時に検出されていた遺構は砂をかぶせ保存していたので、まずは遺構の検出を優先しながら掘り下げを行った。また土器片が集中して出土した箇所については実測作業を行った。2区・3区では遺物の出土量が多かったため小片の土器は一括して取り上げを行った。調査面積は109m²である。

第2節 層位

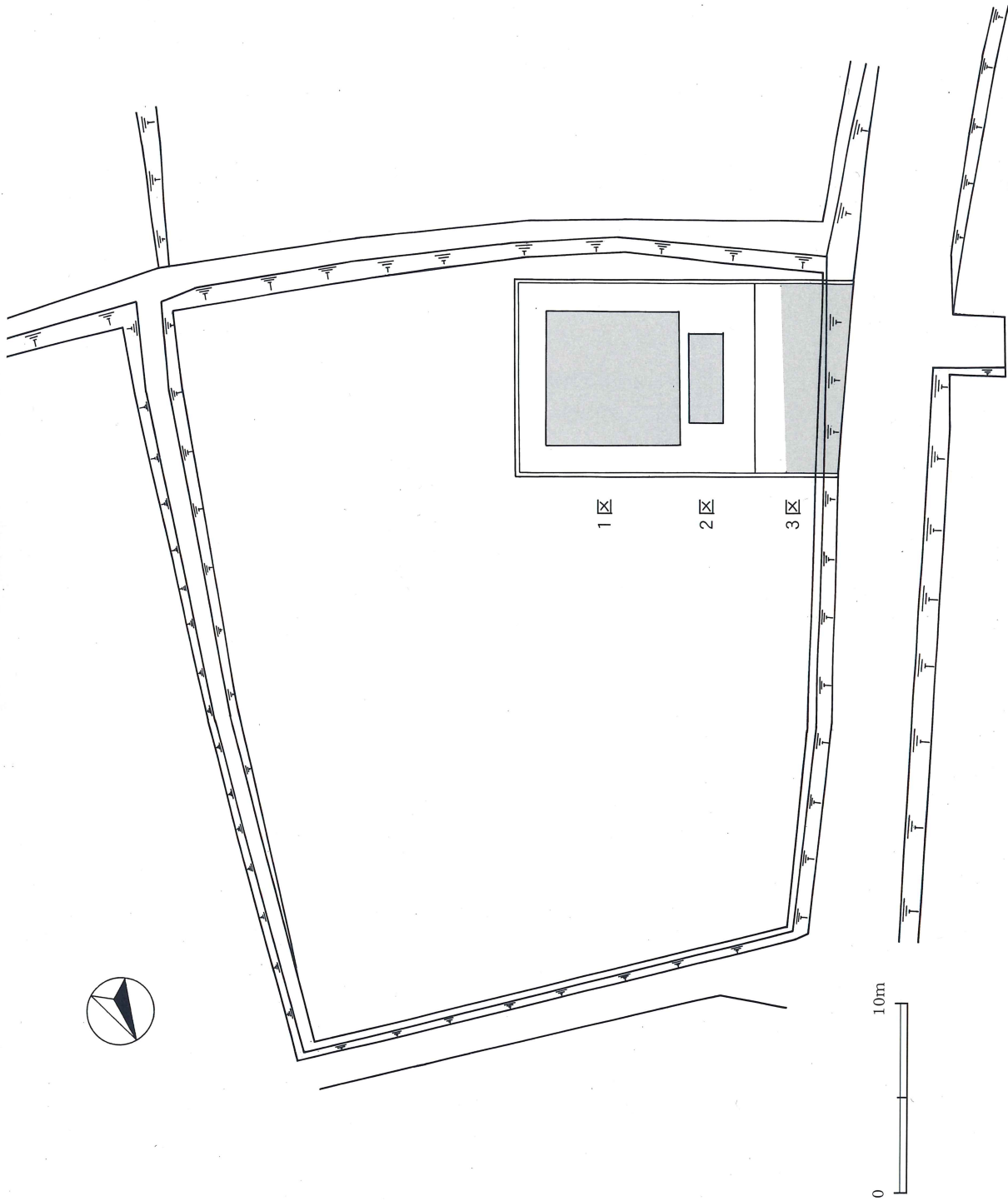
土層は場所によって一部の層が欠落している部分もあるが、基本的には下記のとおりである。

- | | | |
|-------|-----------|------------------------------|
| I 層 | 表土 | |
| II 層 | 黄橙色火山灰土 | アカホヤ火山灰層（約6,300年前の鬼界カルデラ噴出物） |
| III 層 | ベージュ色ローム土 | 遺物包含層（縄文時代早期） |
| IV 層 | 黒褐色土 | |
| V 層 | 黄褐色土 | 粘質により3層に分層できる |
| VI 層 | 明黄橙色火山灰土 | AT火山灰層 |
| VII 層 | 乳茶褐色ローム土 | 粘質が非常に強い |

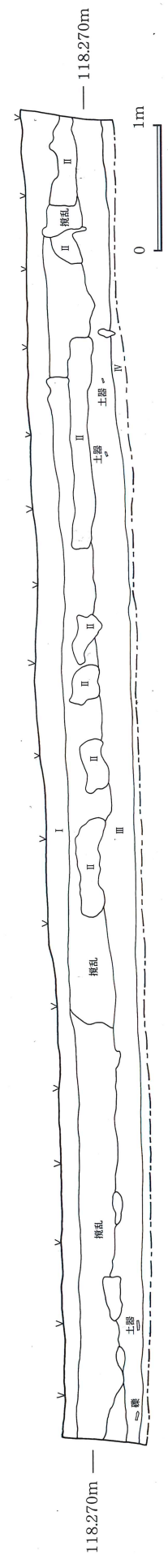
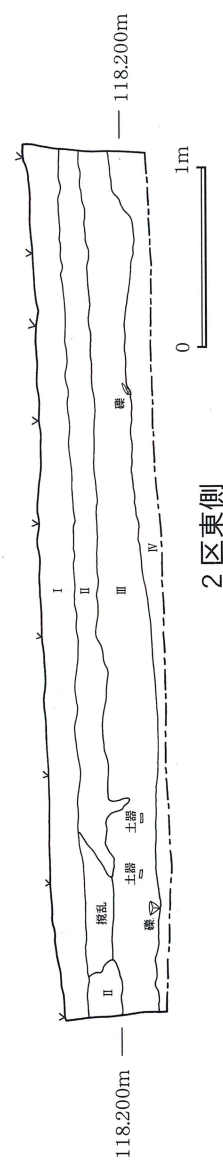
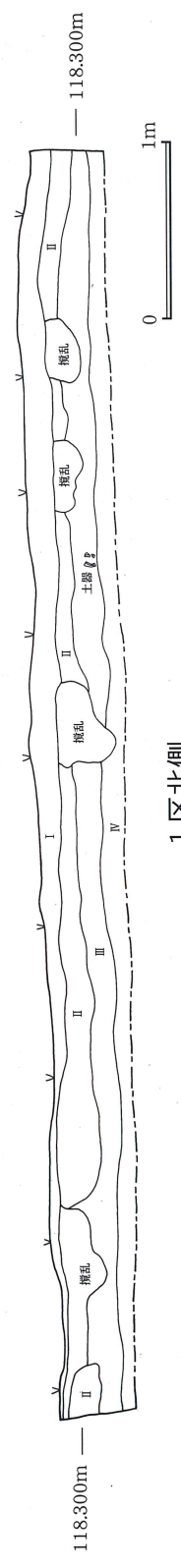
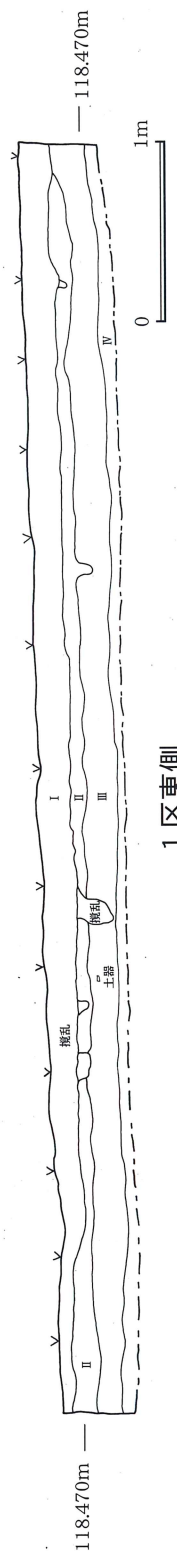
第3節 遺構

1区・3区からそれぞれ遺構が検出された。1区からは130cm×90cmの範囲内に30cmをこえる大きめの礫がほぼ隣接して4点検出されたため1号配石とした。周辺及び内部からは炭化物は検出されず、また下部には掘り込みは認められなかった。全ての礫は炎熱をうけた痕跡は見られないが、1点台石・石皿類と思われる石器（161）が含まれている。構成される礫は全て砂岩である。

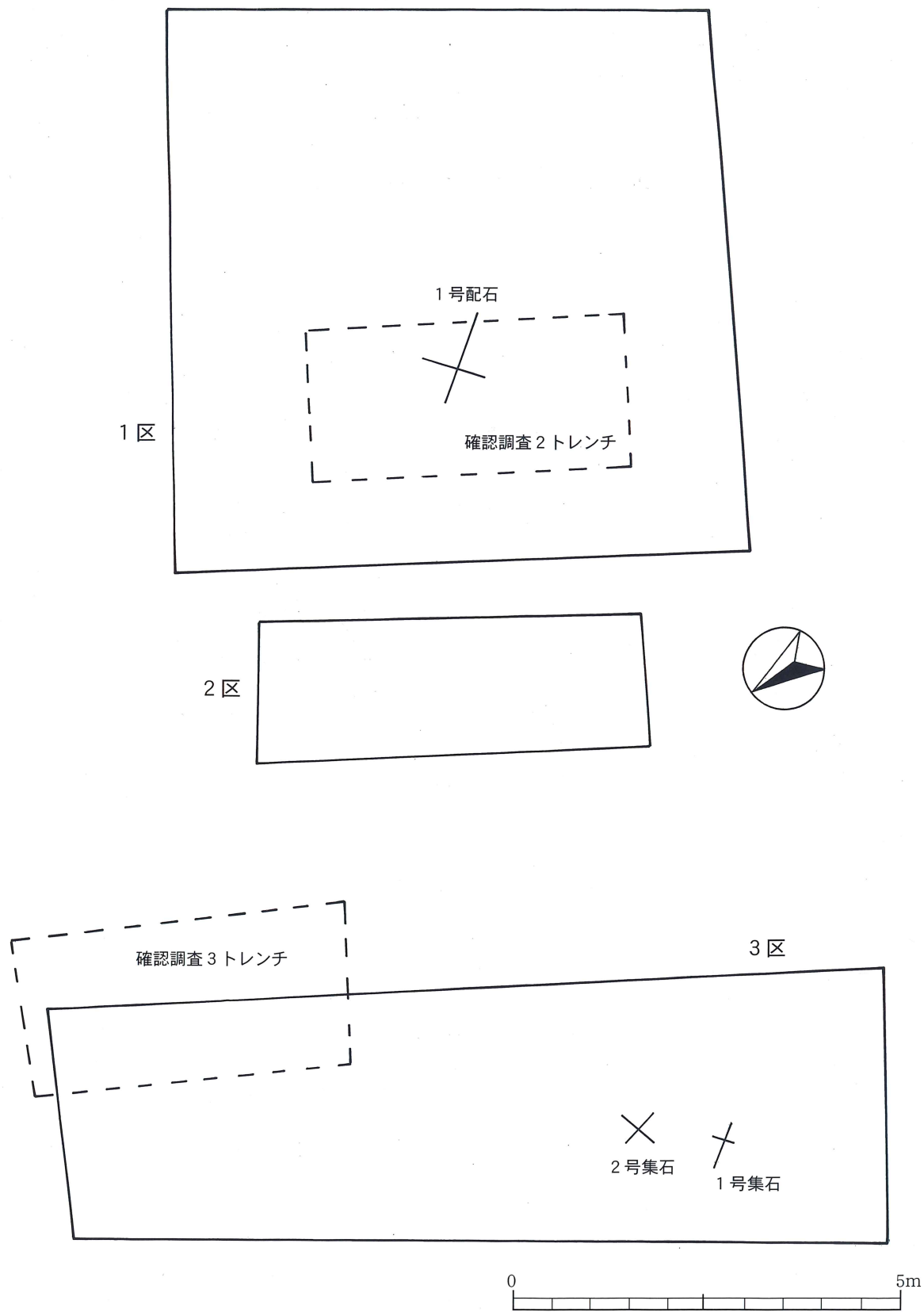
3区からは集石が2基検出された。1号集石としたものは、60cm×40cmの範囲内に拳大の砂岩礫が4点集まった状態で検出された。周辺及び内部からは炭化物は検出されず、下位には掘り込み面は認められなかった。また炎熱を受けた痕跡は見られなかった。2号集石としたものは50cm～



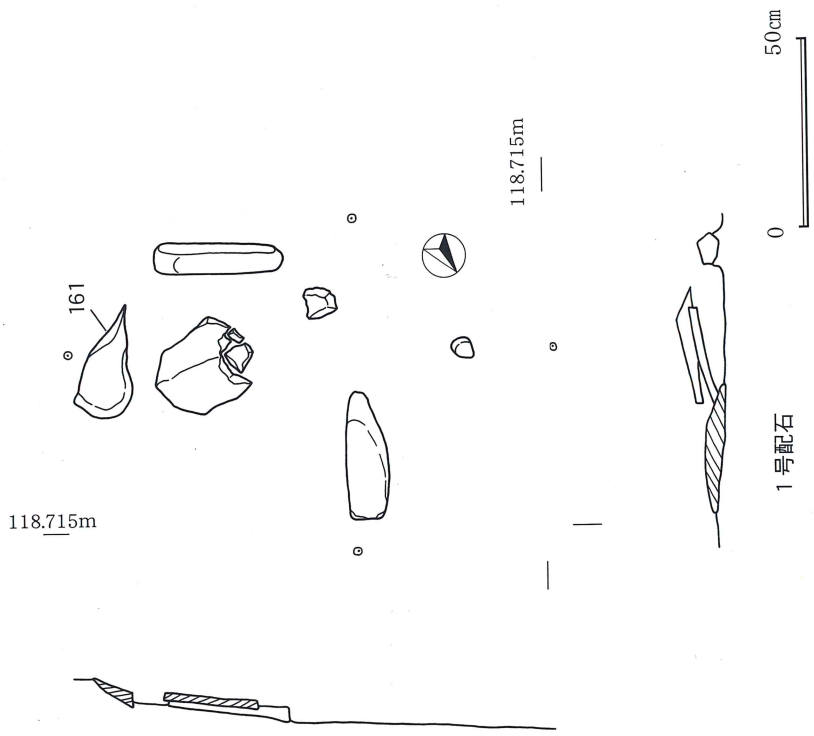
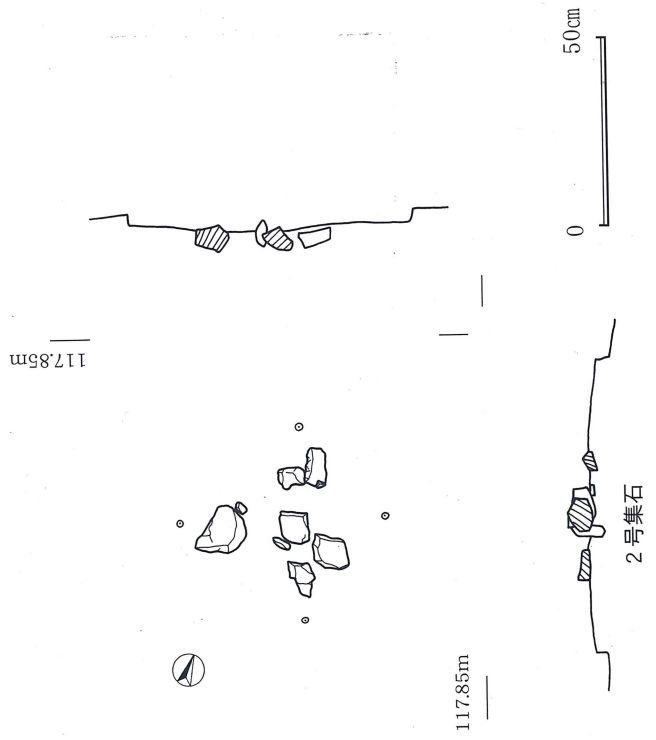
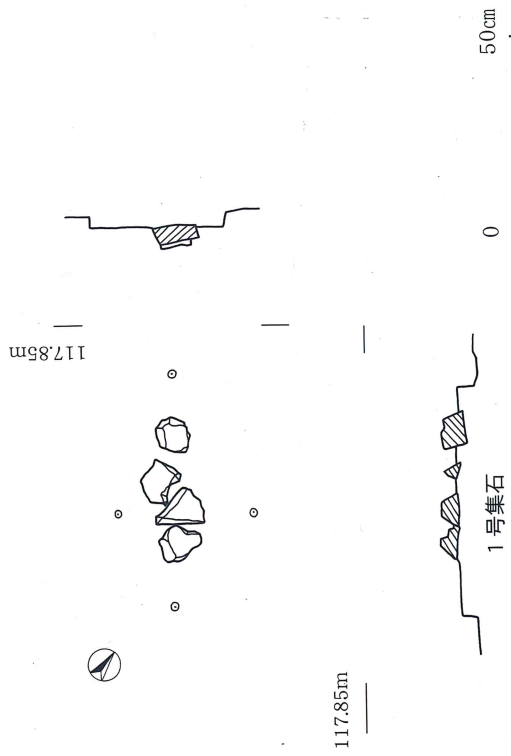
第4図 発掘調査地



第5図 土層断面図



第6図 遺構配置図



第7図 遺構

55cmの範囲内に拳大の砂岩礫が8点まとまって検出された。熱を受け赤化し、熱破碎を受けている礫も見られたが、周辺および内部からは炭化物は検出されず、下位に掘り込み面は認められなかった。

第4節 遺物

遺物は第Ⅲ層から土器片・石器類が出土した。時期区分では縄文時代早期に位置づけられるものである。確認調査時の出土遺物はパンケース5箱分、緊急発掘調査時の出土遺物はパンケース15箱分の出土である。

(1) 土器

緊急発掘調査で番号を付けて取上げた土器片は493点、一括で取上げた土器片も含めると約600点以上の出土であった。出土層は全て第Ⅲ層である。調査面積に比して出土した土器の点数は極めて多い。土器は貝殻文系土器であり、時期区分では縄文時代早期に位置づけられるものである。器形は円筒形になり、文様構成のパターンが一部を除きほぼ同一であったため、各部位ごとに詳述することとする。

①口縁部 (第14図～21図 1～4・6～70)

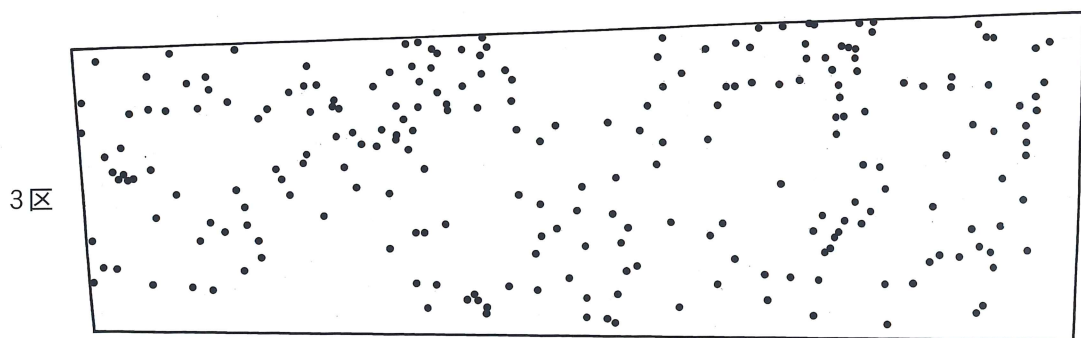
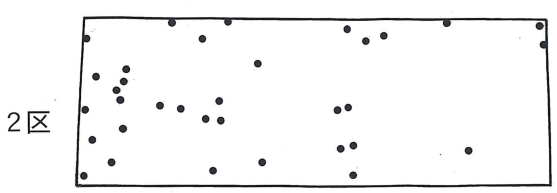
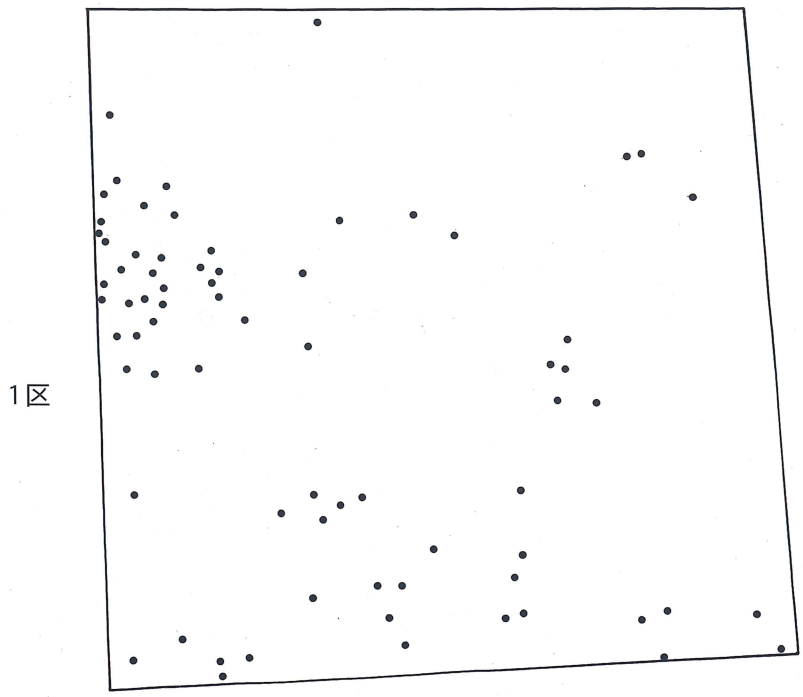
口縁部は施文、口縁部の形態などにより4つに分類した。

I類 (第14図 1～3)

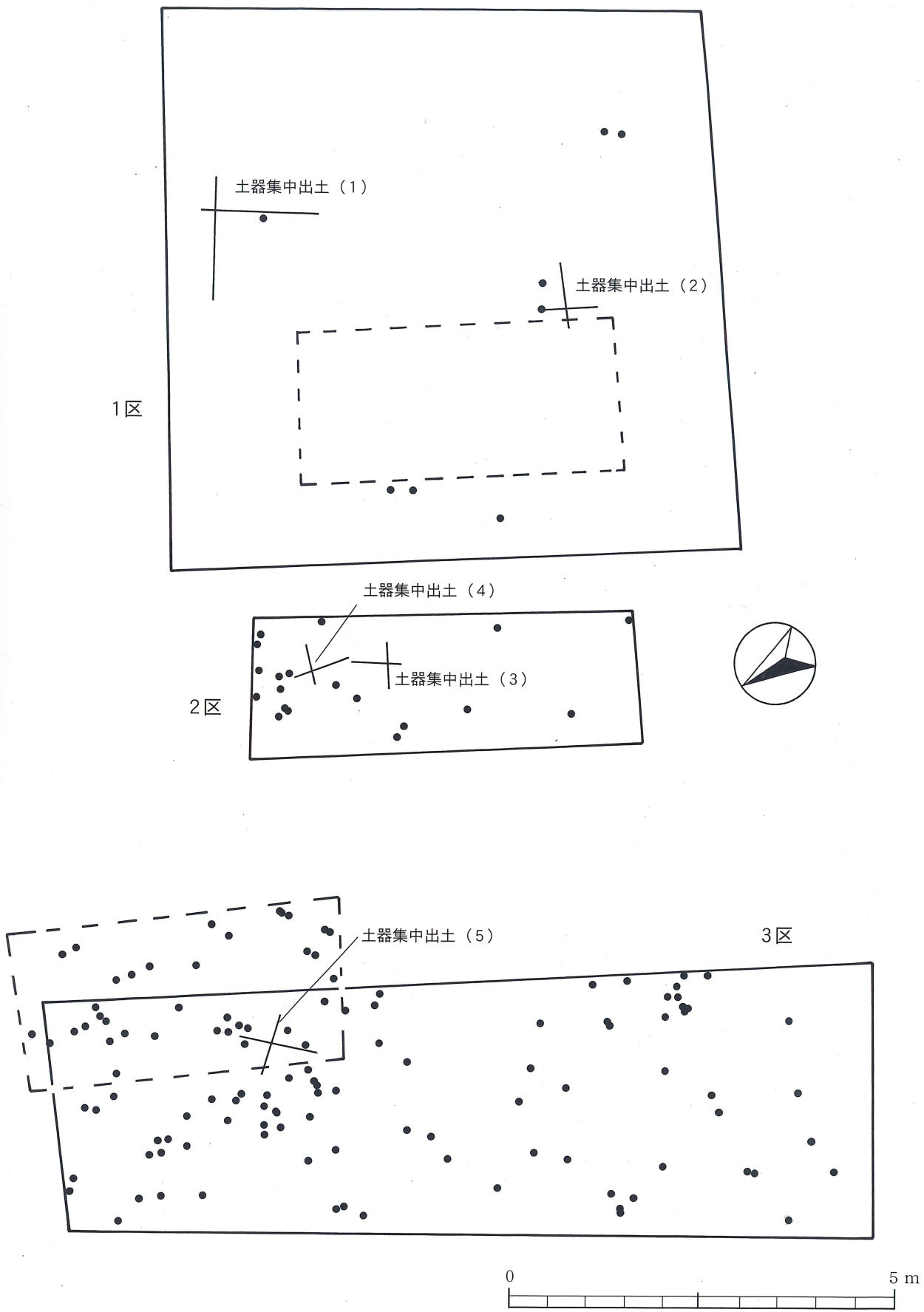
3点のみが該当する。これら3点は同一個体である。口縁部に木の実と思われるものを押圧して縦1.7cm幅0.7cmの楔状の突起を施している。平口縁になる。口唇部には刻み目は見られない。胴部の文様構成は楔状の突起の下に横位に2条の貝殻腹縁部の刺突文がみられその下位には貝殻条痕文が続くものと思われる。器形は円筒形になるとと思われる。

II類 (第14図 4～5)

2点が該当する。同一個体である。口唇部は平坦となり刻み目などは見られない。口縁部には横位に貝殻腹縁部を数条押圧し、中位に幅1.2cmの凸帯文を横位に全周に施しているのが大きな特徴である。凸帯文上には貝殻腹縁部の刺突文か半載竹管状の工具を用いて、施文を行っている。凸帯文の下位にも貝殻腹縁部を数条押圧していくものと思われる。平口縁になり、器形は浅鉢になる可能性がある。内面の整形はヘラ磨き調整が見られる。調査で数百点に及ぶ土器が出土したのであるが、この文様構成をもったものは2点だけでの出土である。

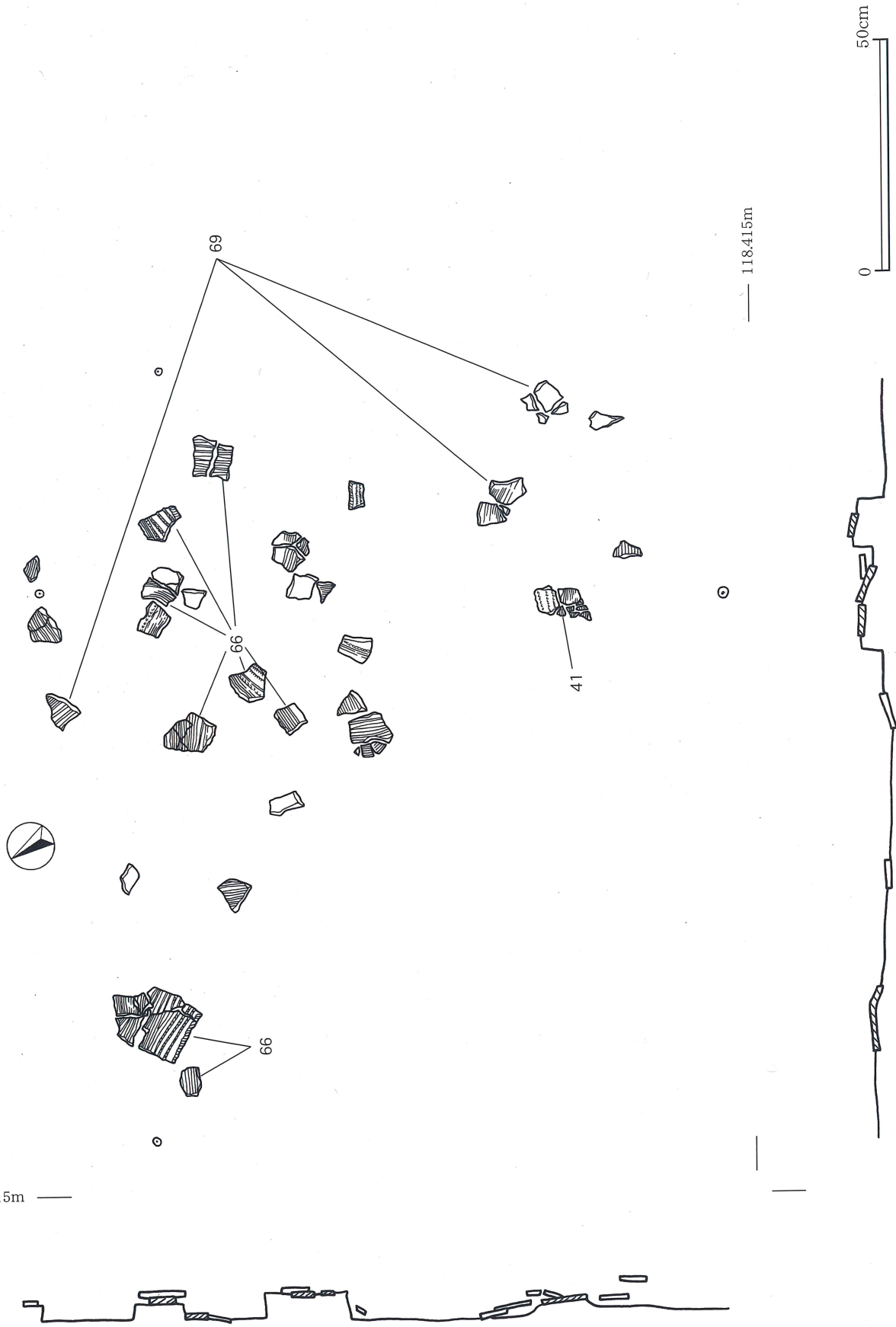


第8図 全遺物出土状況

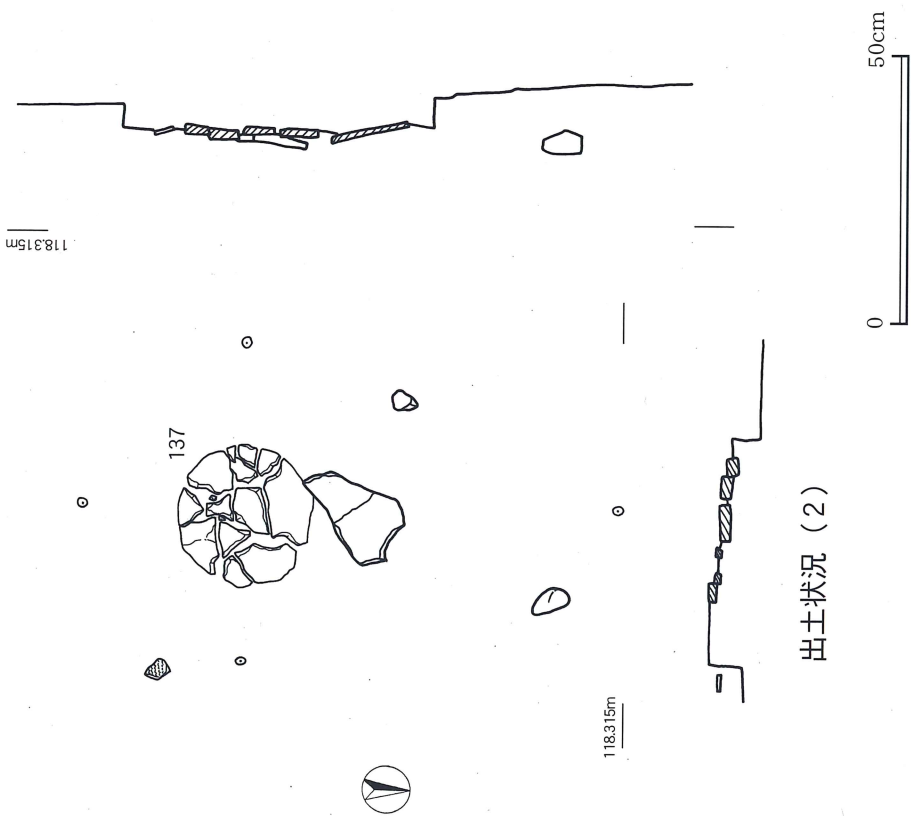
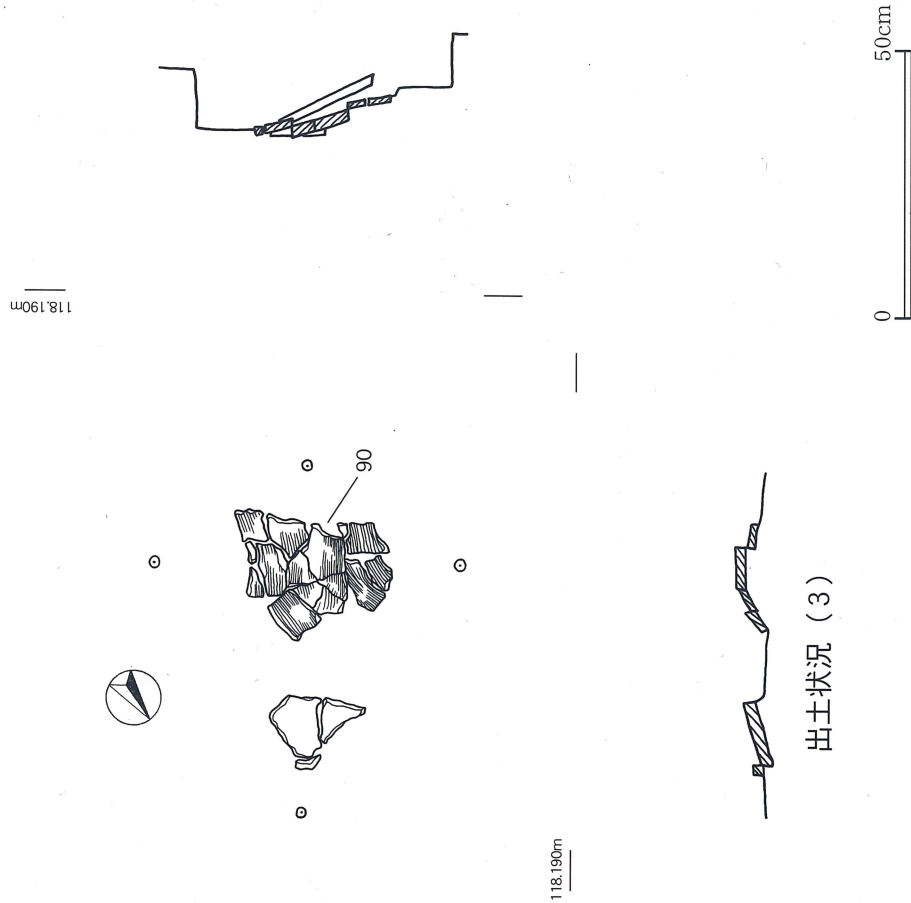


第9図 全土器出土状況

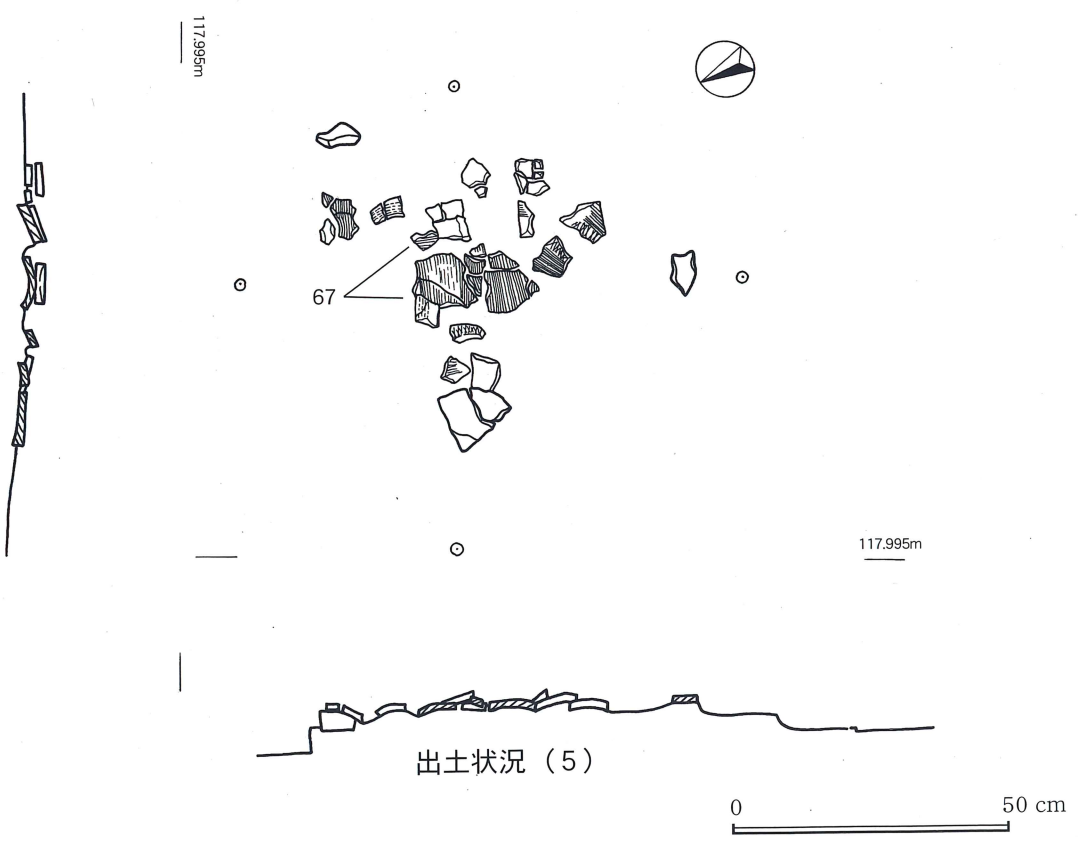
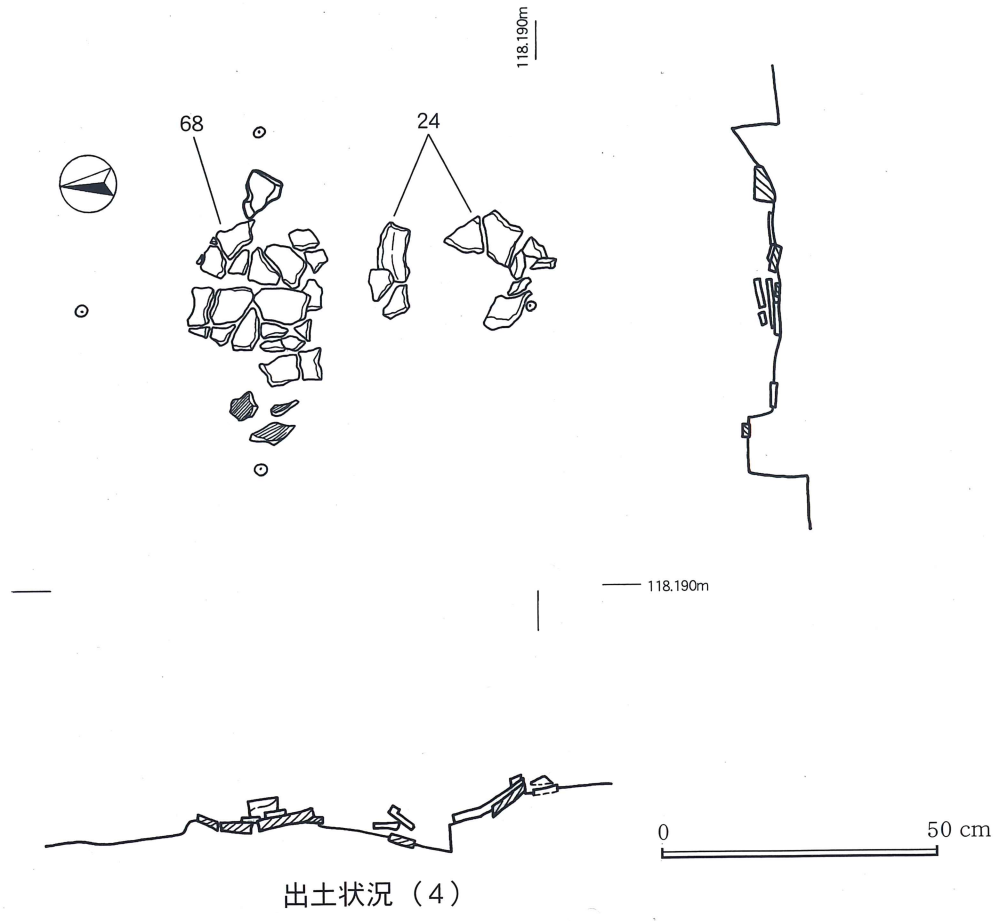
118.415m



出土状况 (1)
第10图 土器集中出土状况 I



第11图 土器集中出土状況 II



第12图 土器集中出土状况Ⅲ

Ⅲ類 (第14図～15図 6～29)

波状口縁を呈するものである。横位に貝殻腹縁部の刺突文を数条巡らし、口唇部は平坦でキザミ目を有する。胴部は貝殻腹縁部による押引文あるいは条痕文を施文する。波状口縁のなかでも12・13・21はレモン形と呼ばれるものになる可能性がある。内面の調整はヘラ磨き調整が見られる。

波状するのか平口縁になるのか判断に迷う土器片も数点あったが、今回は波状の可能性がより強いものだけを掲載した。

Ⅳ類 (第17図～21図 30～70)

平口縁を呈するものである。平坦な口唇部の上にヘラ状のもので連続する縦位のキザミ目を施し、口縁部には貝殻腹縁部を用いて横位の刺突文を数条施すものである。

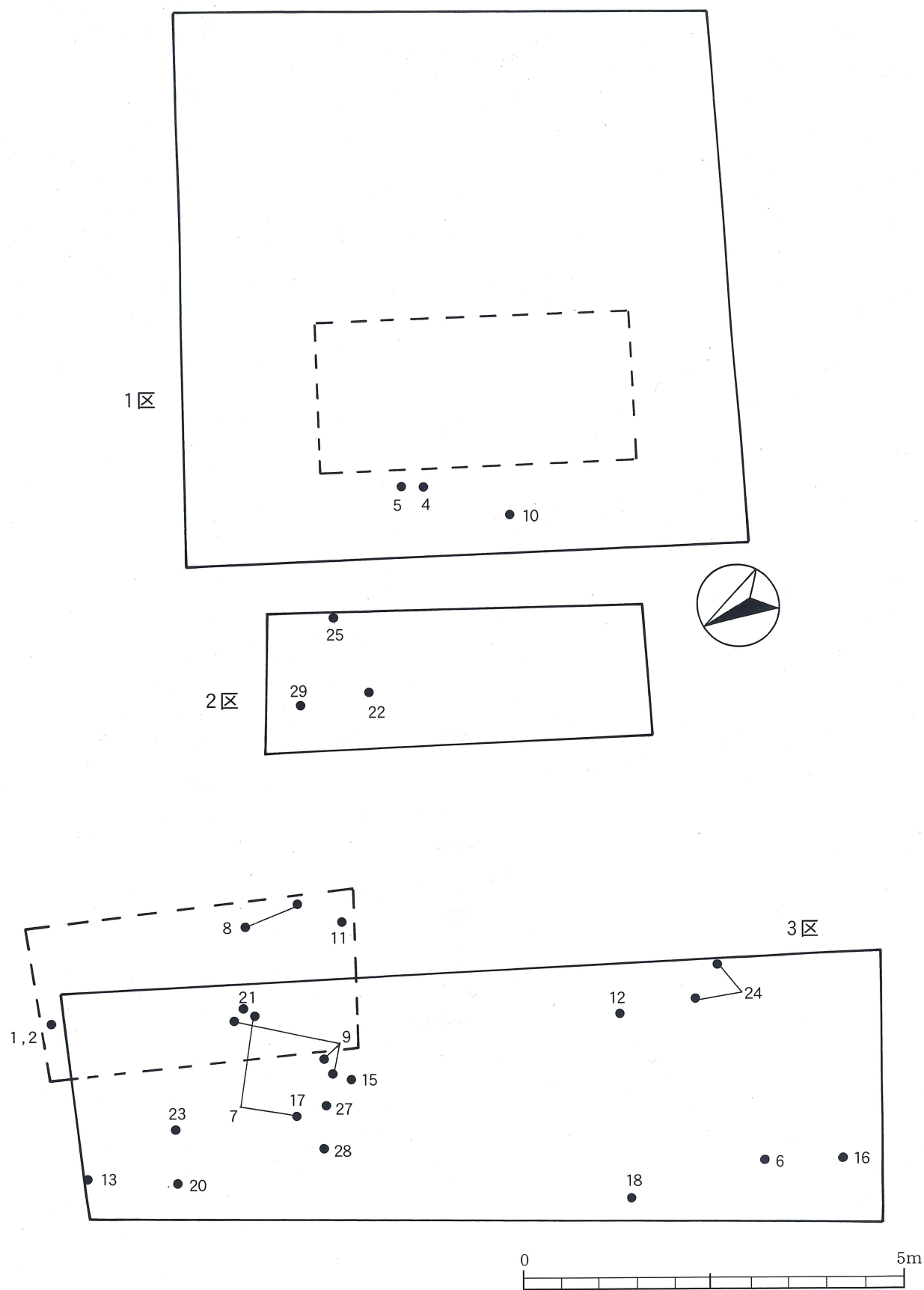
30・64は文様構成が若干異なり、30は横位に3条の貝殻腹縁部の刺突文を施し、その下位に縦位の貝殻刺突文を施す。64は5条の浅い貝殻腹縁部の刺突文を施し、3条目から5条目の刺突文の上にヘラ状の工具で縦位に連続して施文を行っている。

66～70は接合により大きめの破片となったものである。66は口縁部からほぼ底部付近まで接合できた。口縁部の文様構成は7条の貝殻腹縁部による刺突文を連点状に横位に施す。その下位には貝殻条痕文が横位に施されているが、貝殻腹縁部の側面を押し引いて施文を行っている箇所が3条見受けられる。口唇部は平坦となり、キザミ目を有するものである。内面はヘラ磨き調整を行っている。67は口縁部の一部を欠くが底部まで接合できた。胴部は全面に貝殻条痕文が施されている。底部には外面の立ち上がり部分にヘラ状の工具により縦位のキザミ目を施文している。内面はヘラ磨き調整を行っているが、底部の立ち上がり部分にはケズリが見受けられる。68は口縁部に5条の貝殻腹縁部の刺突文を横位に連点状に施している。口唇部は平坦でキザミ目を施す。胴部はわずかに2条のごく浅い横位の貝殻押引文がみられるが、大部分は貝殻条痕文で構成されている。69は12条の貝殻腹縁部による横位の刺突文を施す。口唇部は平坦となる。僅かであるが、浅いキザミ目が見受けられる。胴部は2条の極めて浅い貝殻押引文が見られるが、他は全て貝殻条痕文である。内面はヘラ磨き調整である。70は口唇部がやや外反し、僅かであるがキザミ目を有する。貝殻腹縁部による横位の刺突文を12条施す。その下位には貝殻押引文が見られるが、はっきりとはしない。押引文の下位には条痕文が6条続き、その下位に再び浅い押引文が続くというパターンである。器面上に縦長穿孔の補修孔が観察される。内面はヘラ磨き調整が施されている。

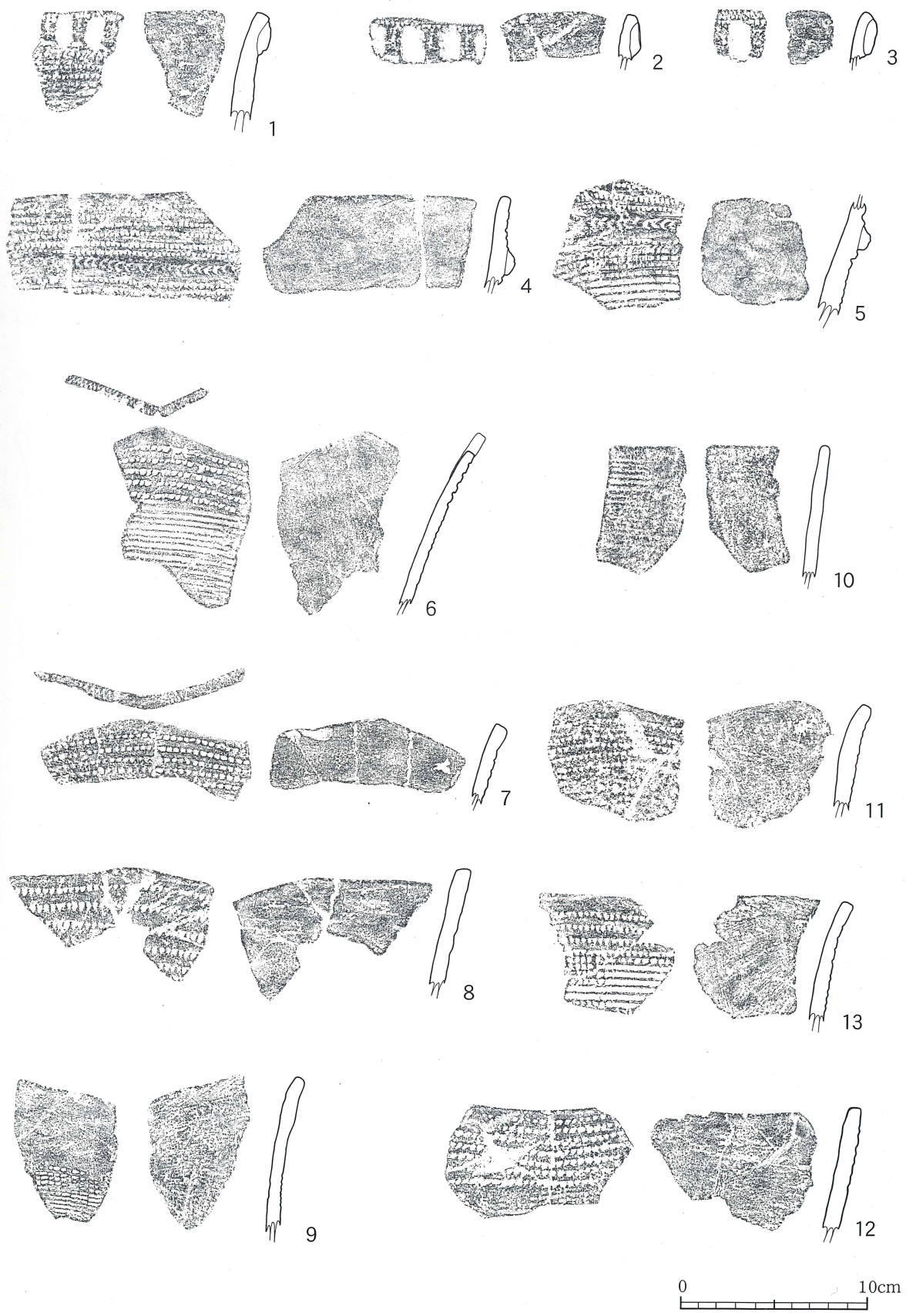
②胴部 (第23図～28図 71～110)

貝殻押引文・貝殻条痕文を施文するものと、押引が見られず貝殻条痕文のみを施すものと大きく2つに分けることができる。

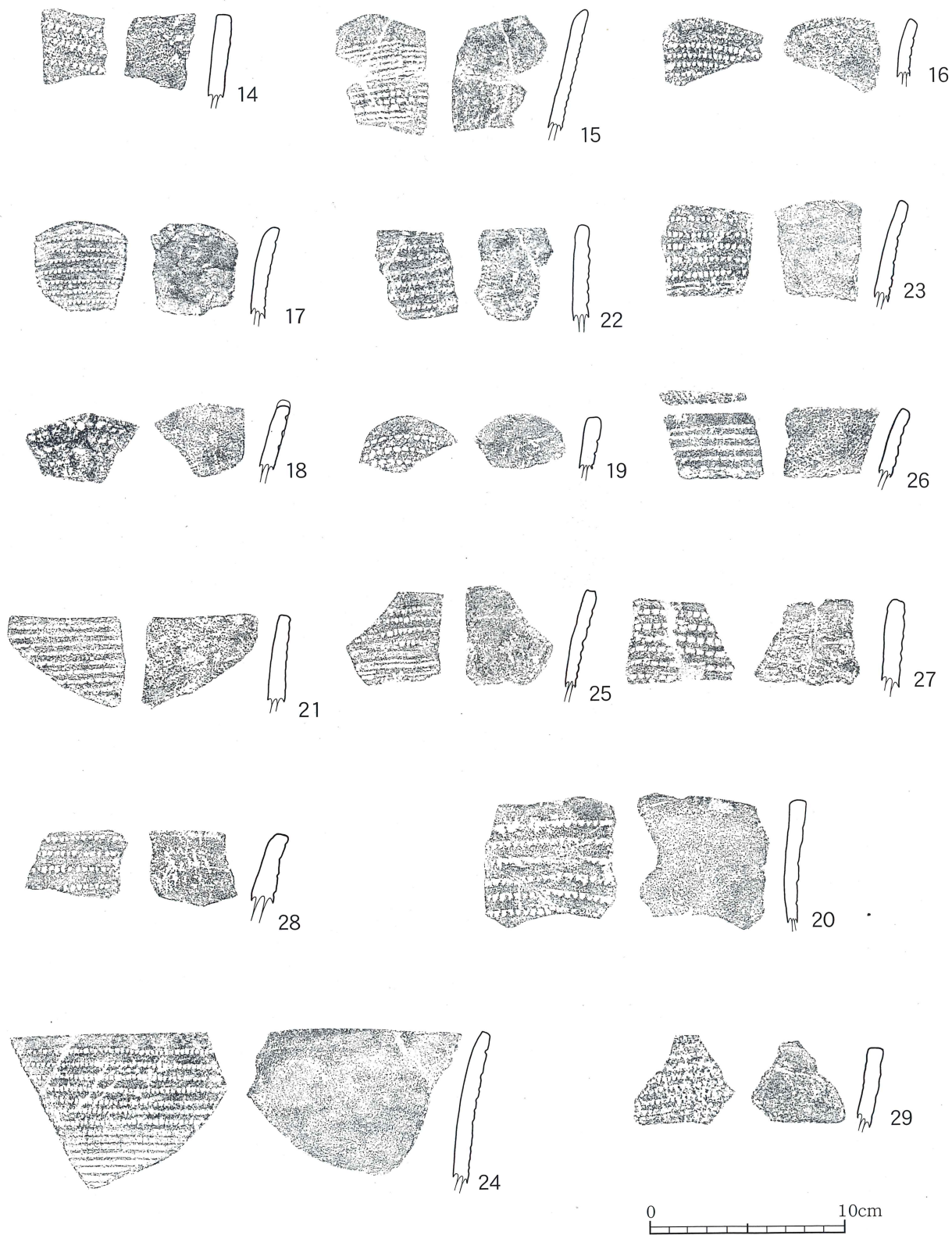
71から89は貝殻腹縁による押引文が施されているものである。71は押し引きの文様の幅が約3.5cmになる。出土した土器の中では比較的はっきりと押引が確認できる。74は細かい押引文が施され、上位には半裁竹管状の工具を押し出したと思われる刺突が見受けられる。75は押引文が上位には確認できるが下位にいくにつれて、はっきりしなくなる。78は全面に押引が施されている。



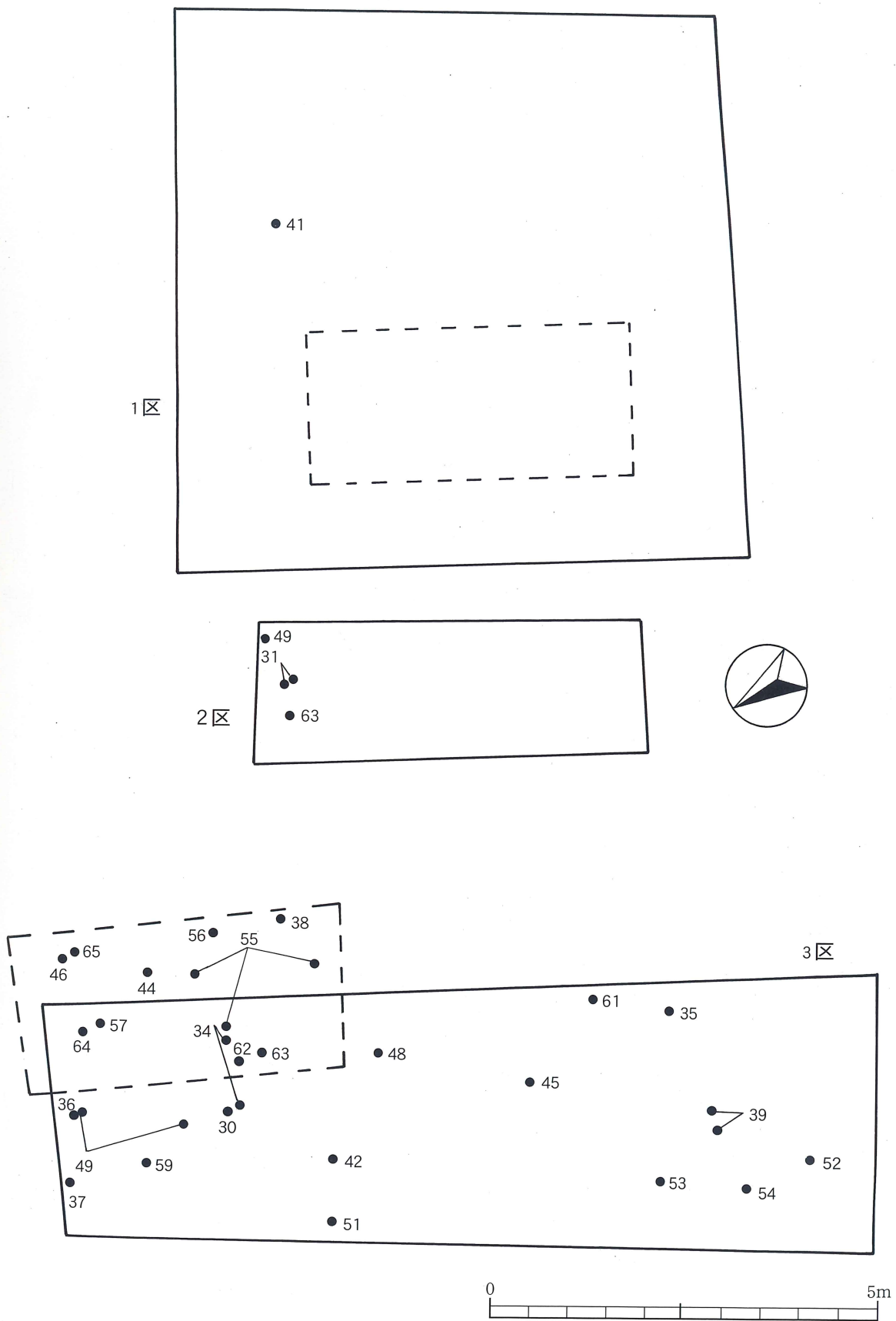
第13図 土器出土状況 (I・II・III類)



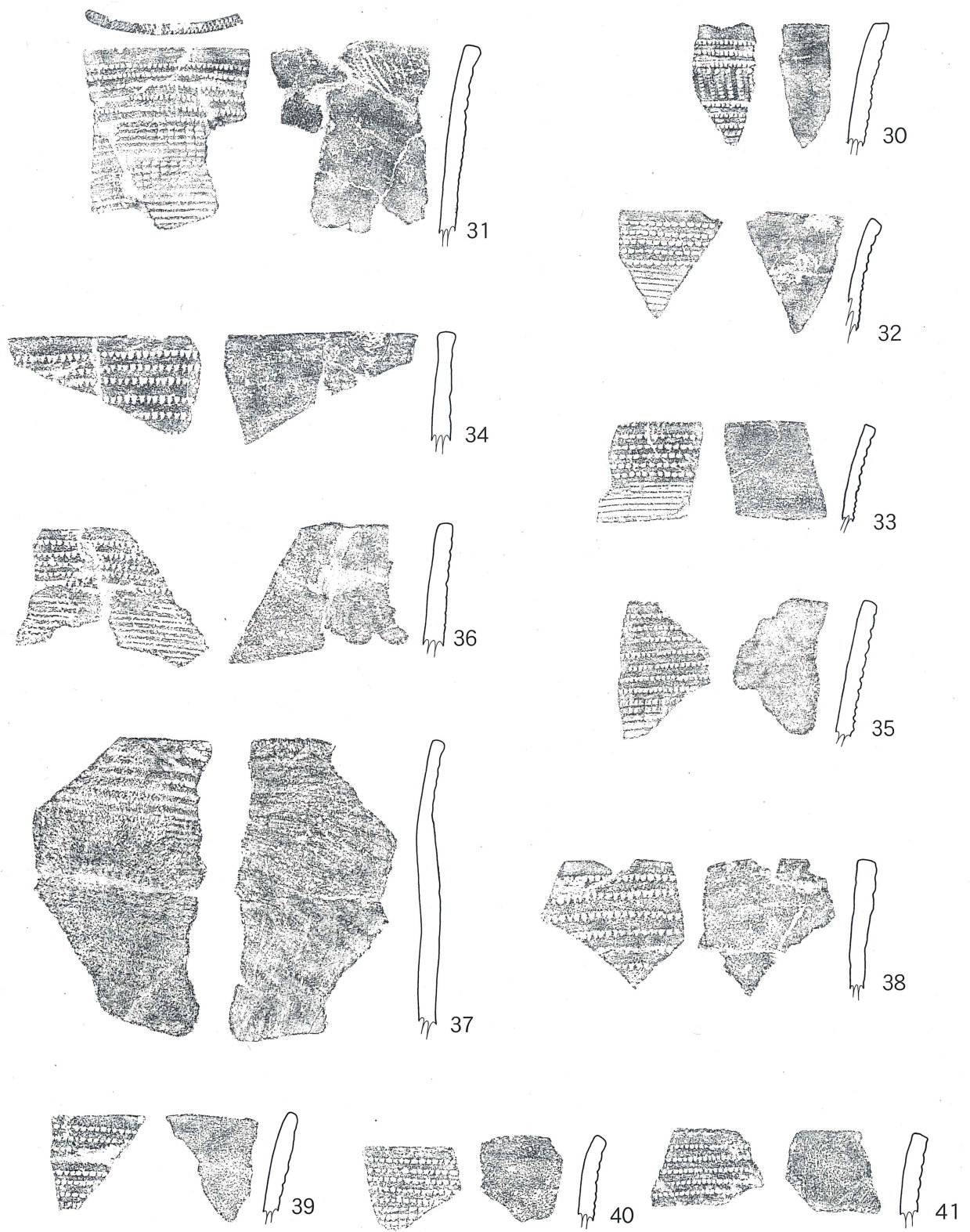
第14図 出土遺物(1)



第15図 出土遺物(2)



第16図 土器出土状況 (IV類)

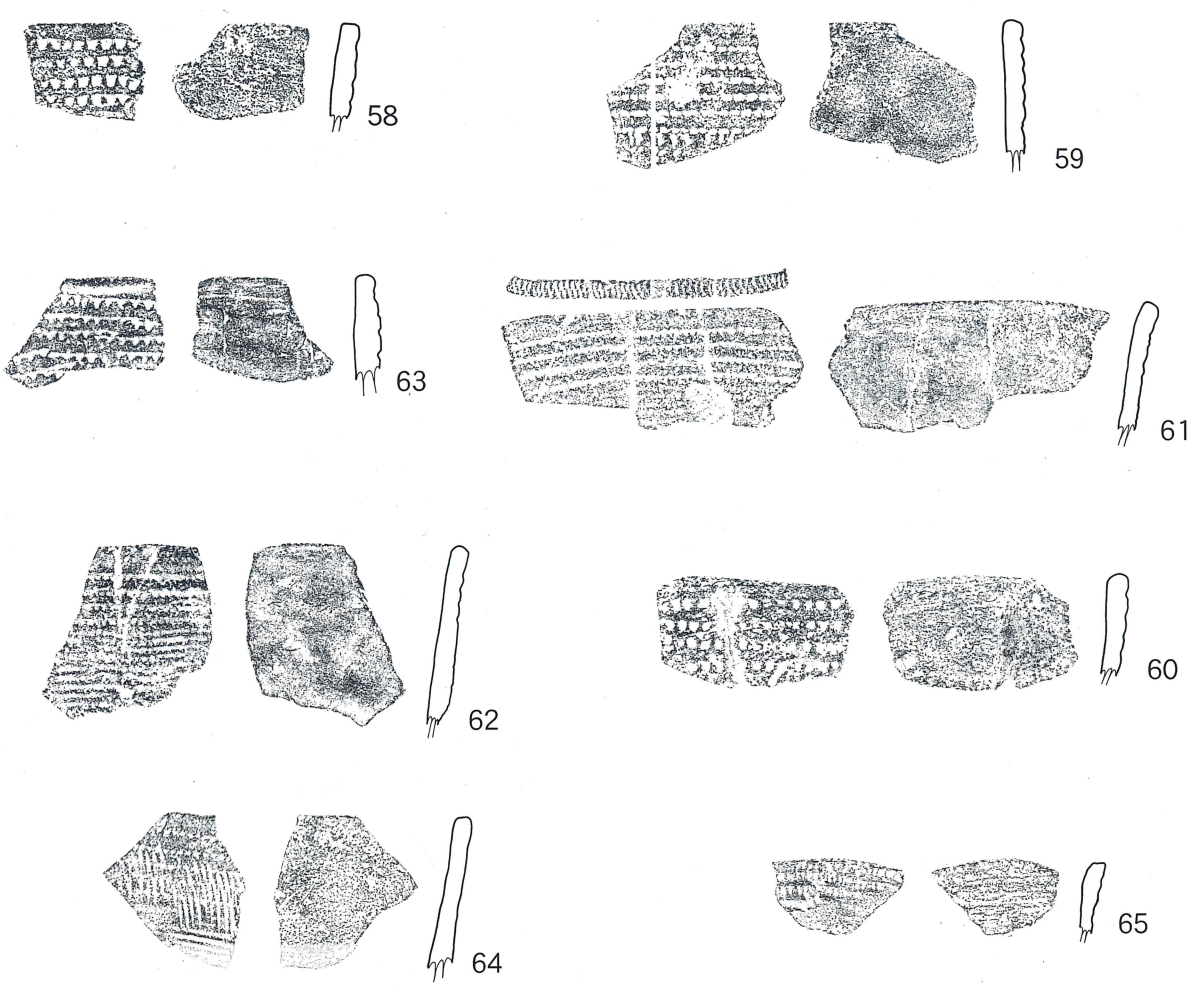


0 10cm

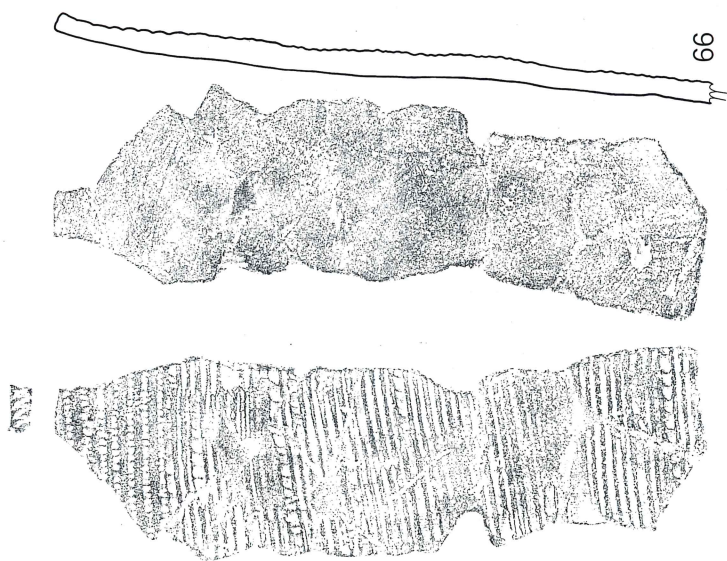
第17図 出土遺物(3)



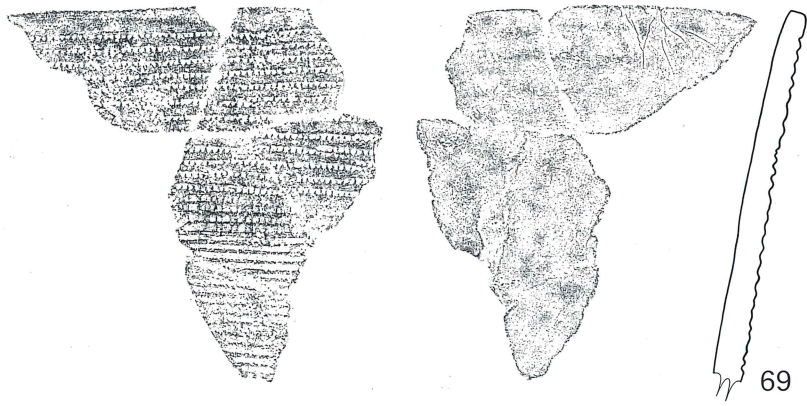
第18図 出土遺物(4)



第19図 出土遺物(5)



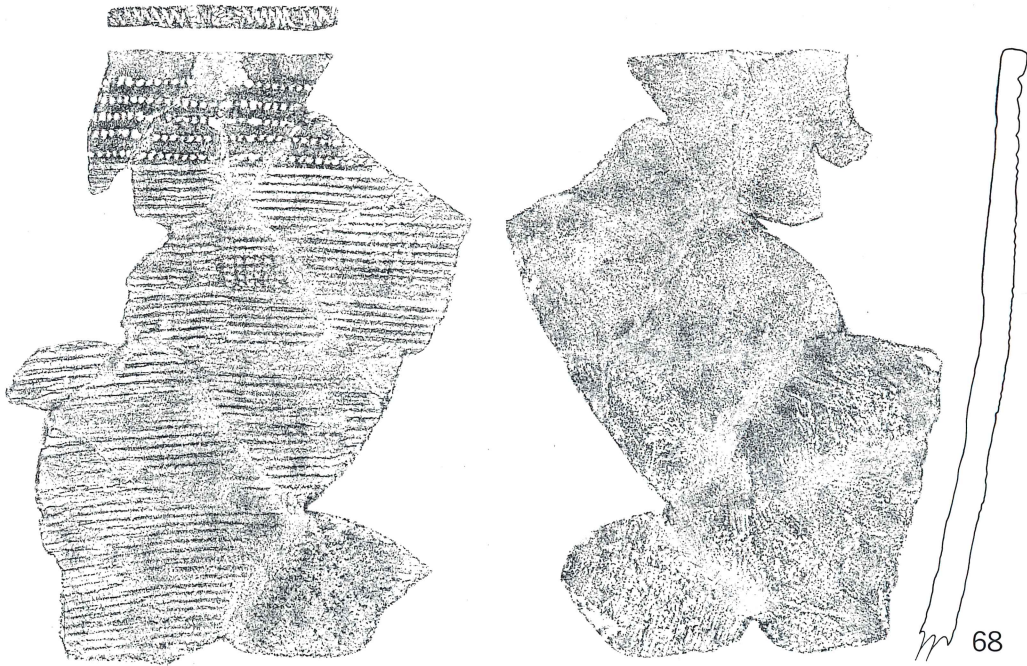
第20图 出土遺物 (6)



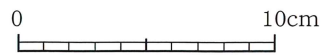
69



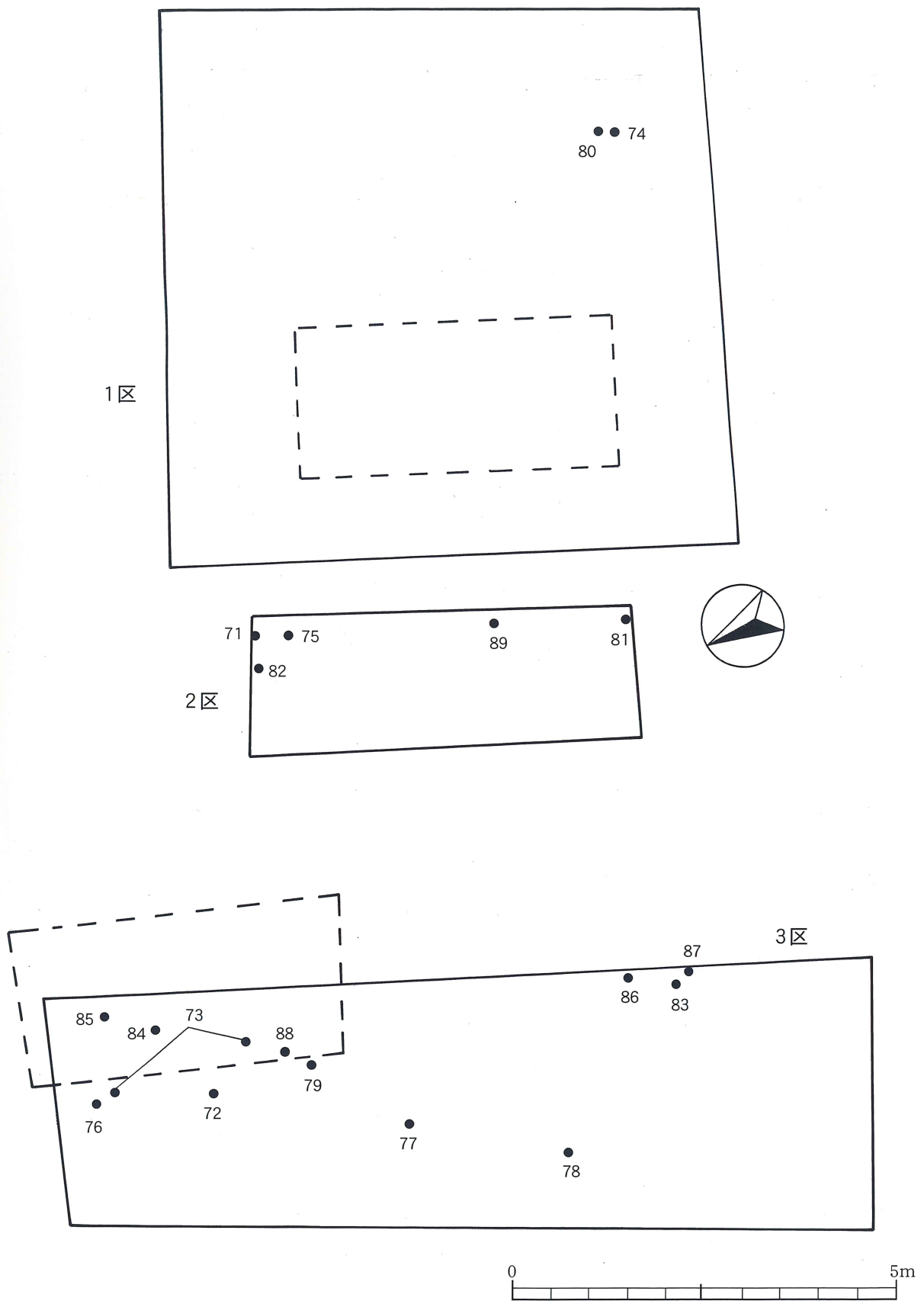
70



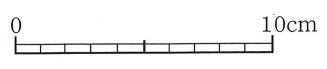
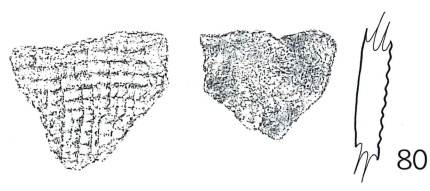
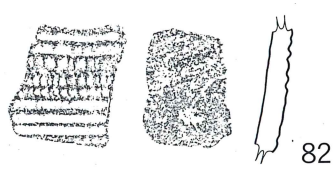
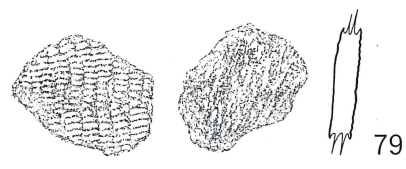
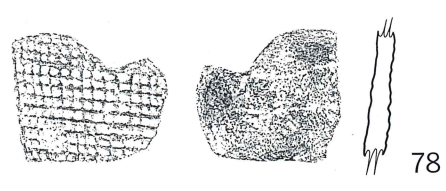
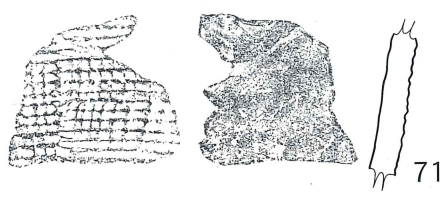
68



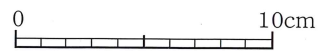
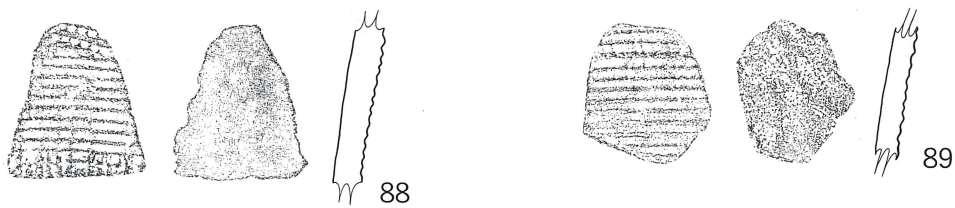
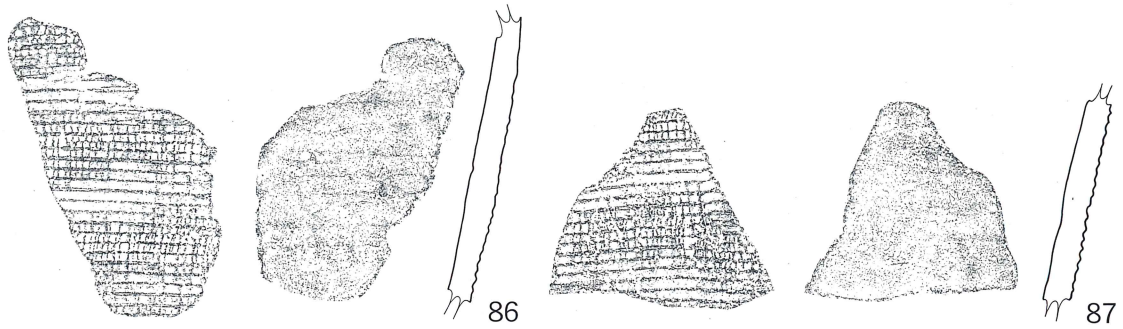
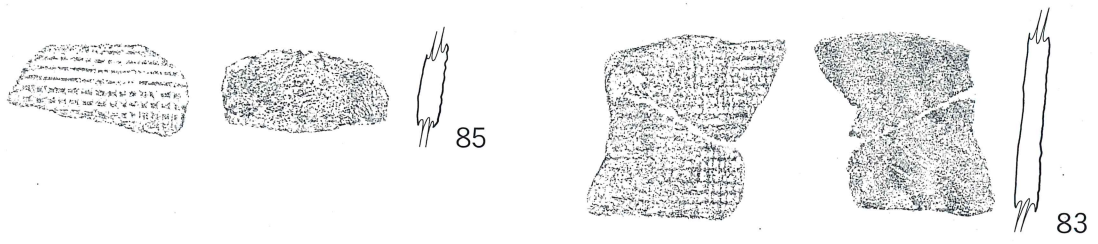
第21图 出土遺物（7）



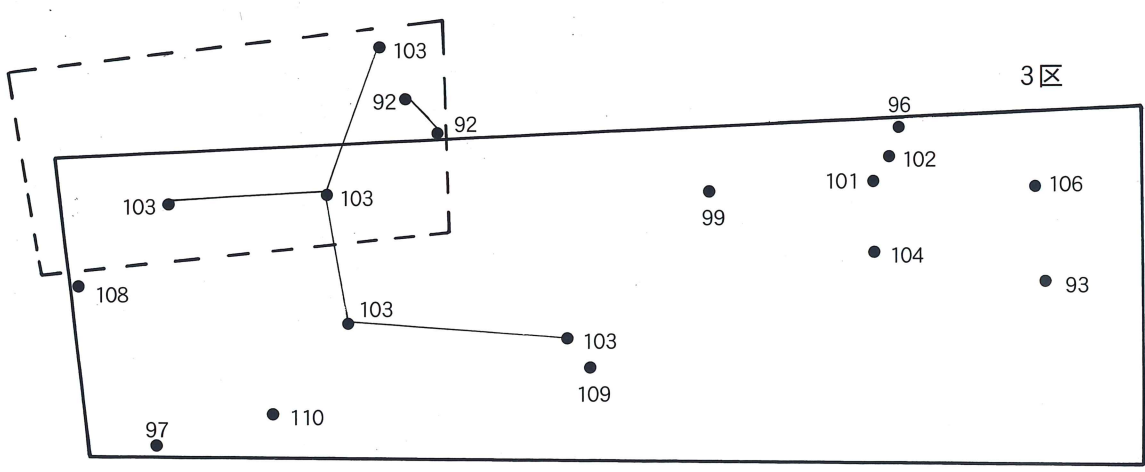
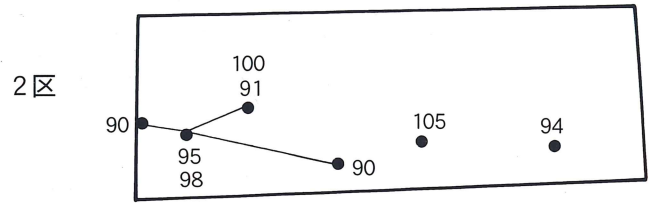
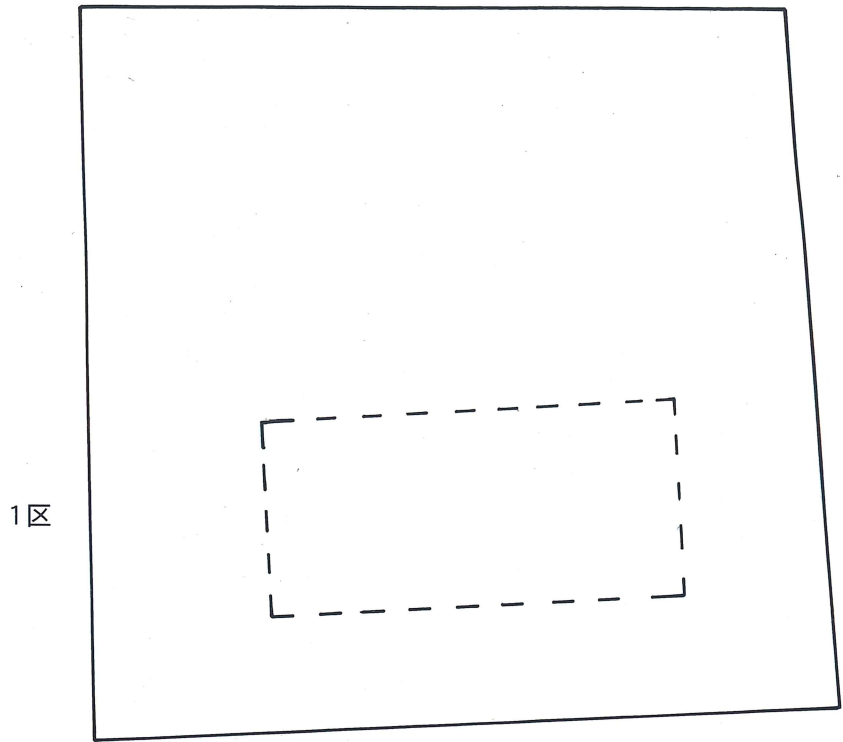
第22図 土器出土状況 (胴部)



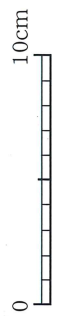
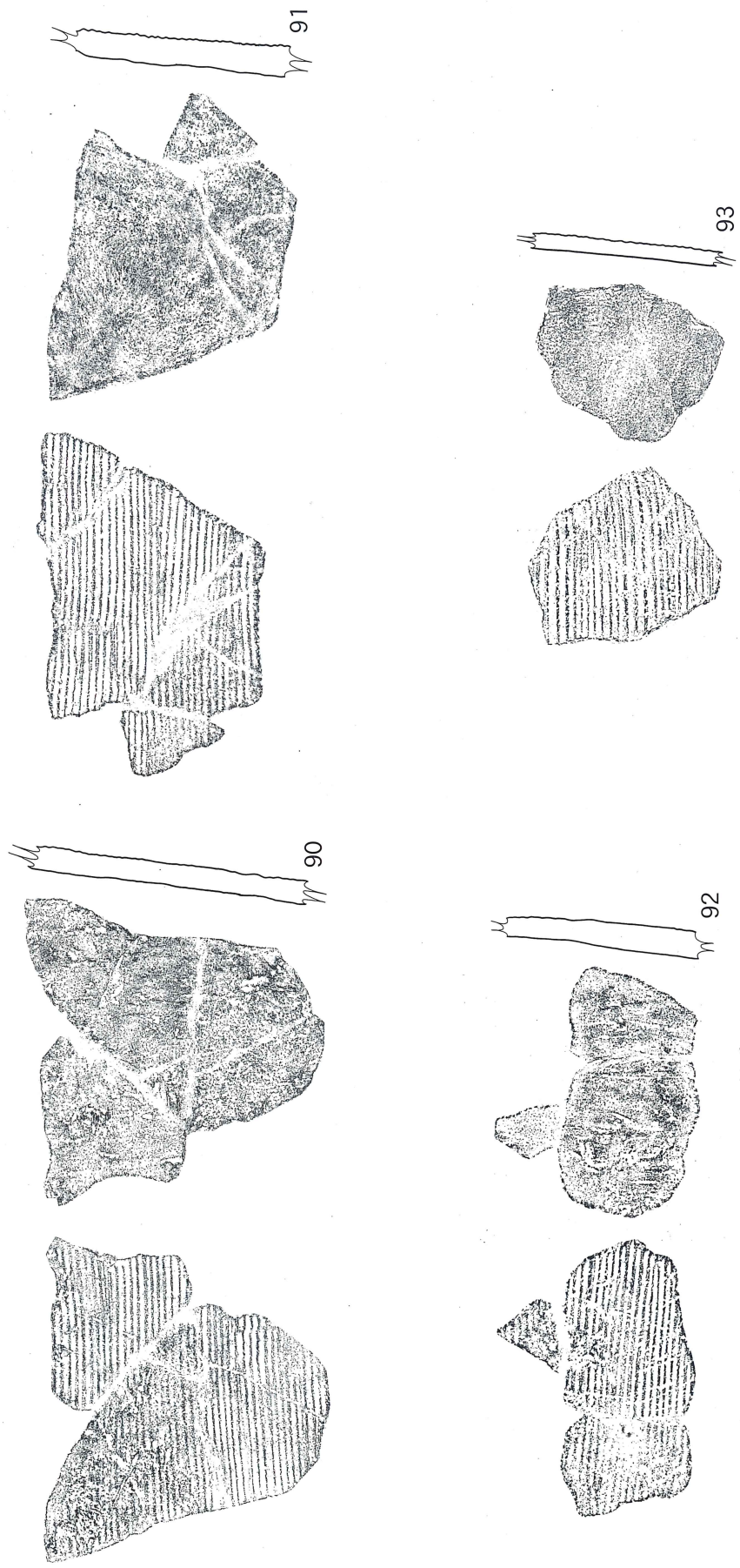
第23図 出土遺物(8)



第24図 出土遺物(9)



第25図 土器出土状況 (胴部)



第26图 出土遺物 (10)